

令和4年度 学修行動調査レポート

令和5年7月

はじめに

本学は、大学の大衆化と学生の多様化が一層進む中、大学教育の質を社会に保証していくことが求められており、これに対応するために各種の施策に取り組んでいる。

大学基準協会「大学評価研究」（第13号2014年8月）において、「現状の教育課程の内容が、学生の主体的な学修を十分に促す内容となっているか、学生が卒業までに教育目標に沿った学修成果を十分に達成できているかを検証し、今後の具体的な改善方策につなげていくPDCAサイクルを確立する必要がある。そのためには、学修時間・学修行動の実態把握が必要となる」との学修行動調査の必要性が述べられている。この趣旨を踏まえ、本学では、学生の質保証や学修成果の可視化への取組に向け、学生本人が、自らの課程を通じた学修成果を把握するために、教育の学修経験を問う「学修行動調査」を院生を含む全ての学生を対象に平成30(2018)年度から実施している。

令和2(2020)年度からは、学修行動調査結果に対する所見で、卒業・修了認定・学位授与の方針に掲げる目標値を学生が達成しているかを把握し評価を行うとともに、その結果を踏まえ、「教育課程や教育内容・方法などの改善方策」を示している。

なお、令和3(2021)年度「学修行動調査」は、「授業改善のための学生アンケート」をはじめ、文部科学省による「全国学生調査」や学生部による「学生実態調査」が実施されていることに伴い、調査内容の重複を回避し、かつ学生及び教員の負担軽減とするため、実施を取り止めた。

目次

- 調査目的／調査概要 3
- 回答者プロフィール 4
- 授業の中での経験 13
- 授業時間外の学修態度 20
- 本年度の週当たりの学修等時間 25
- 入学時と比べ、身に付いた学修成果・経験 32
- 学部設問項目 44
- 学修行動調査結果に対する所見 51

調査目的／調査概要

<調査目的>

本調査は、学生の主体的な学修を促す教育課程となっているか、卒業・修了時までには教育目標に沿った成果が上がっているかなどを検証し、その結果を教育課程や授業の改善に資することを目的に実施した。

<調査概要>

- ・ 調査方法：インターネット調査（Web調査：拓殖大ポータルからリンク）
- ・ 調査対象：拓殖大学・学生、大学院生(約1万人)
- ・ 調査期間：2023年1月6日（金）～2023年2月13日（月）
- ・ 回答者数：2439名

	商学部	政経学部	外国語学部	工学部	国際学部	学年計
1年生	247	270	53	99	94	763
2年生	178	169	49	82	70	548
3年生	140	186	33	119	59	537
4年生	132	143	33	69	60	437
学部計	697	768	168	369	283	2285

	学年計
博士課程前期1年	55
博士課程前期2年	64
博士課程後期1年	8
博士課程後期2年	5
博士課程後期3年	9
修士課程1年	5
修士課程2年	8
大学院生計	154

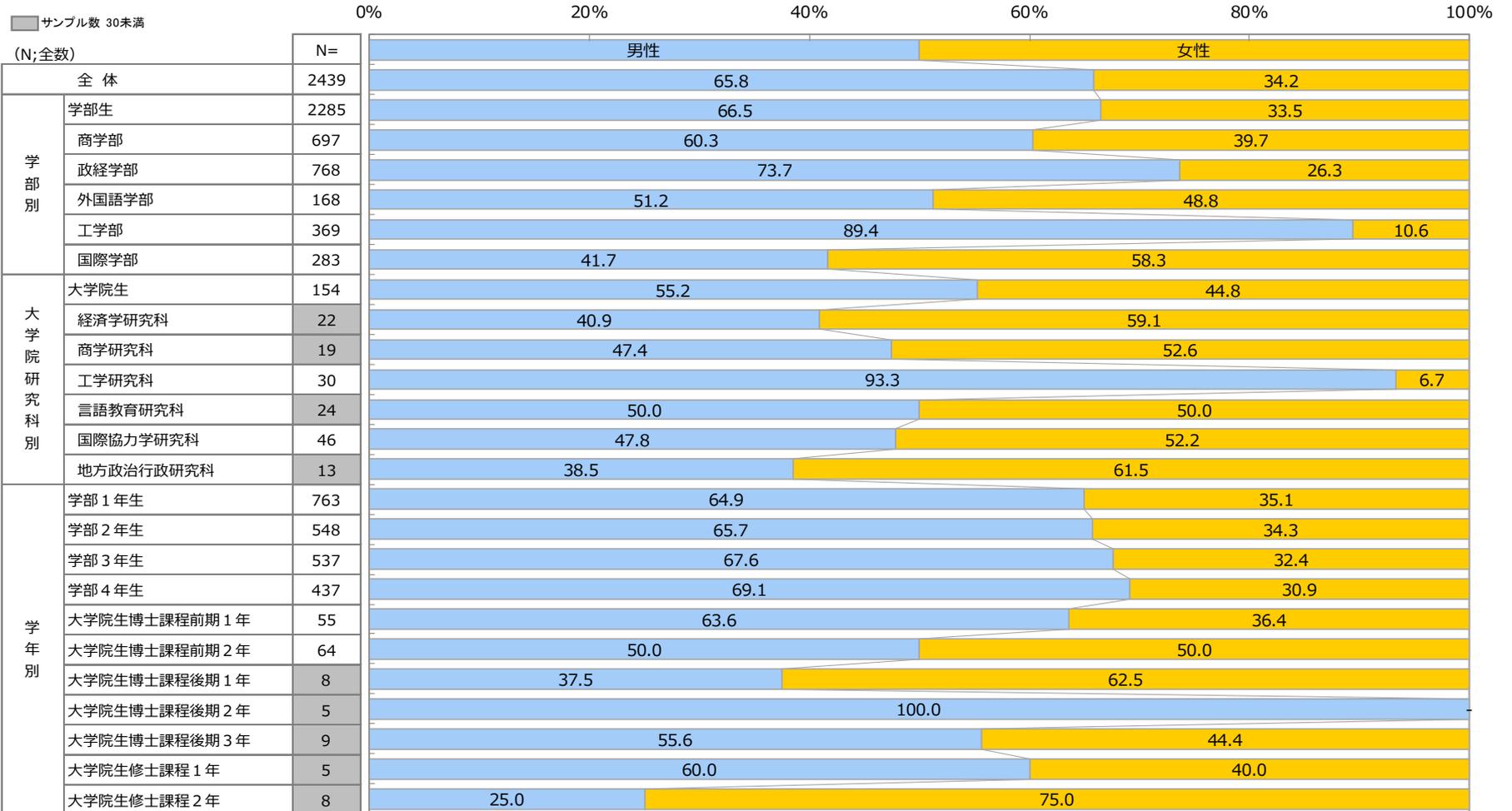
- ・ 調査主体：拓殖大学
- ・ 調査実施：ビデオリサーチ

回答者プロフィール

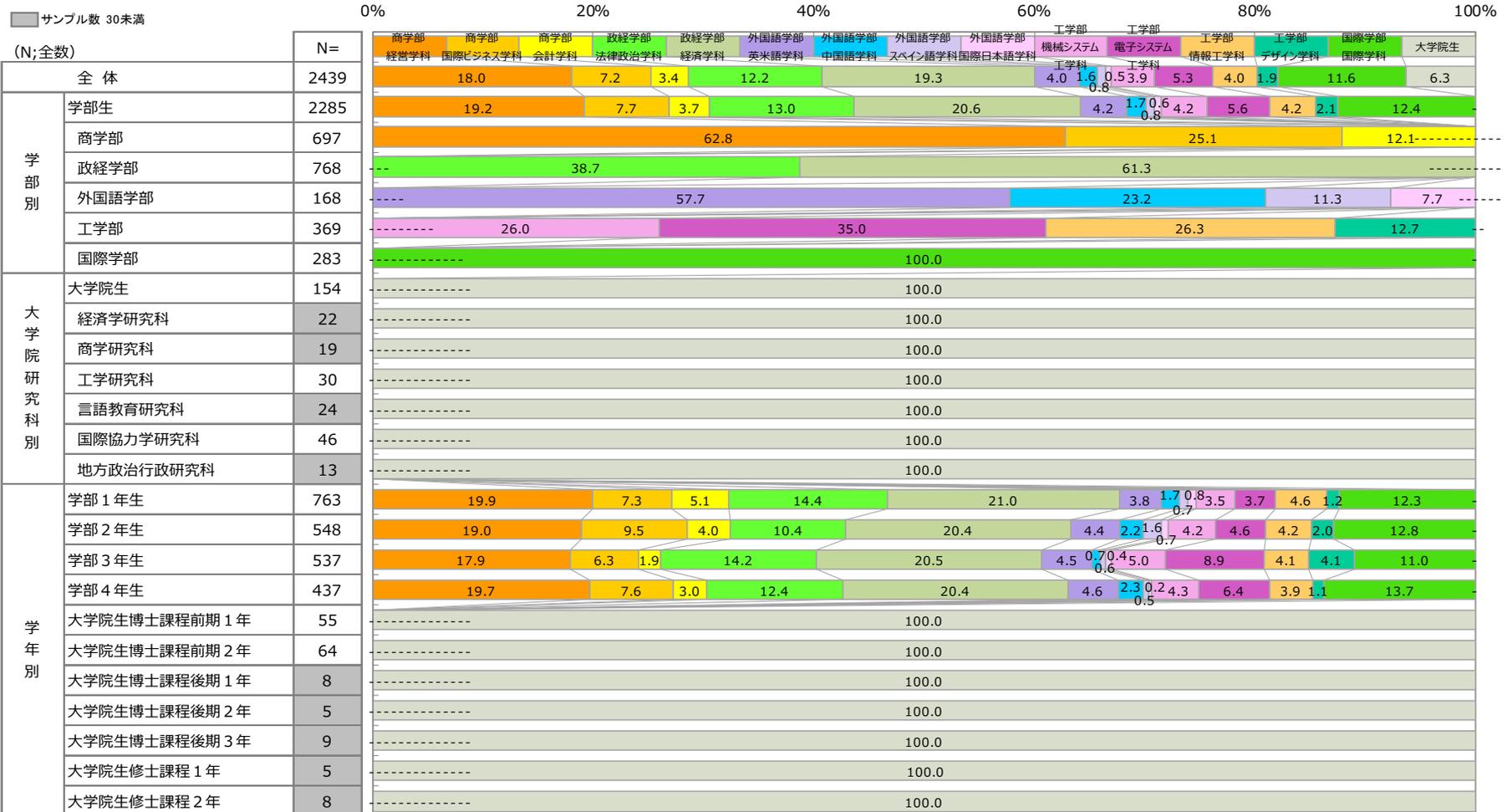
性別

Q1.あなたの性別をお知らせください。(SA)

- ・性別は、全体で「男性」65.8%、「女性」34.2%である。
- ・学部生、大学院生いずれも「男性」が「女性」を上回る。
学部生の中では、国際学部で「女性」が「男性」を上回る。



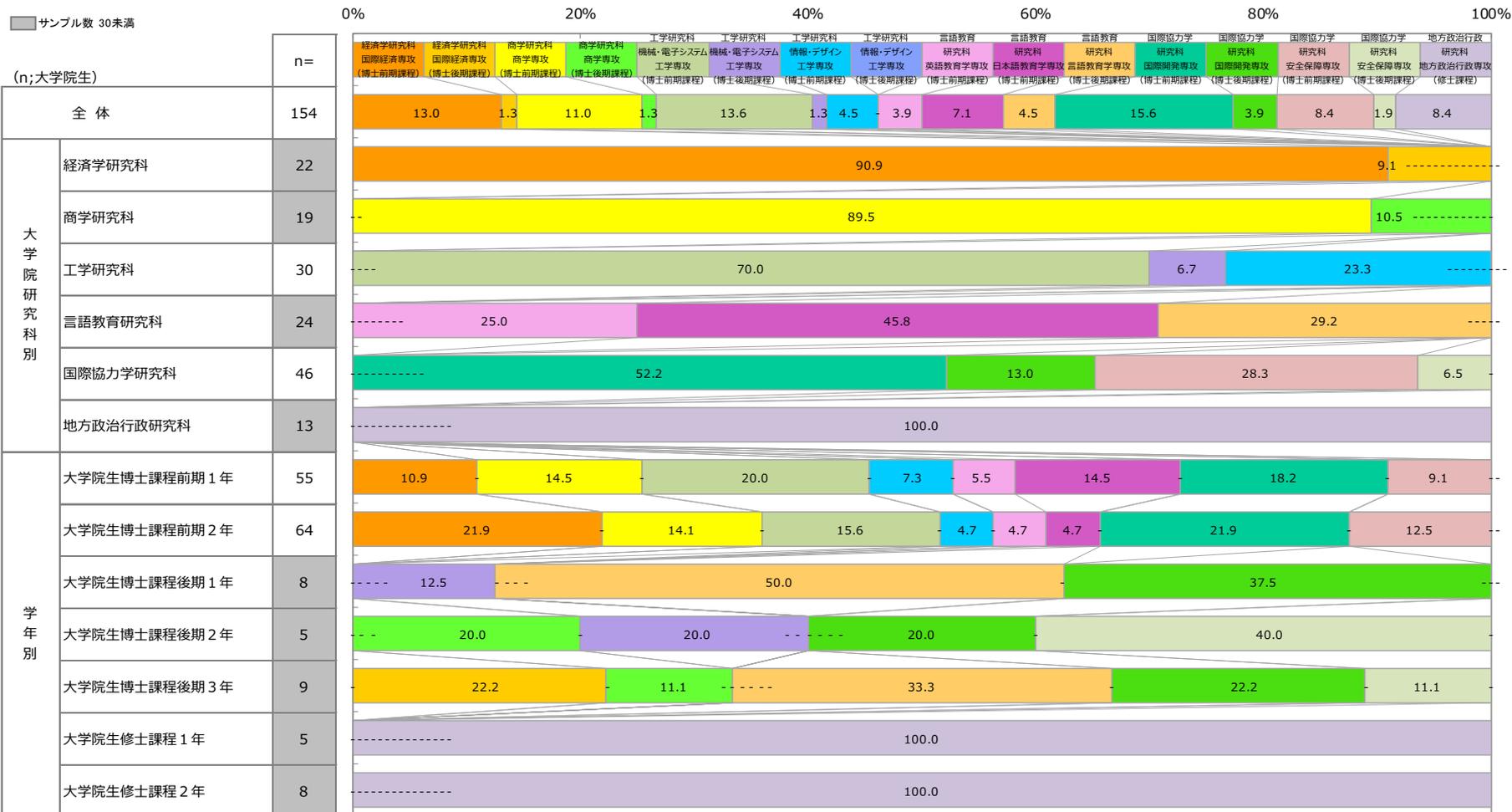
- ・所属は、全体で「政経学部 経済学科」が19.3%、「商学部 経営学科」が18.0%、「政経学部 法律政治学科」が12.2%、「国際学部 国際学科」が11.6%で10%を上回る。
なお「大学院生」は6.3%である。



所属（大学院生）

Q2SQ.あなたの所属をお知らせください。（SA）

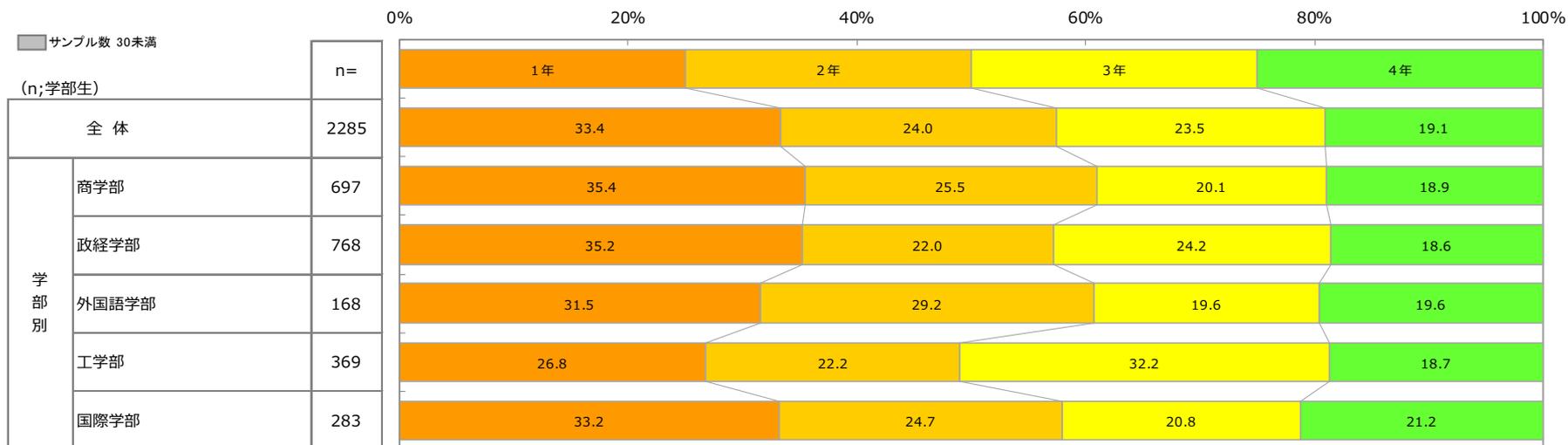
- ・大学院生の所属は、「国際協力学研究科 国際開発専攻（博士前期課程）」が15.6%、「工学研究科 機械・電子システム工学専攻（博士前期課程）」が13.6%、「経済学研究科 国際経済専攻（博士前期課程）」が13.0%、「商学研究科 商学専攻（博士前期課程）」が11.0%で10%を上回る。



学年（学部生）

Q2SQ2.あなたの学年をお知らせください。（SA）

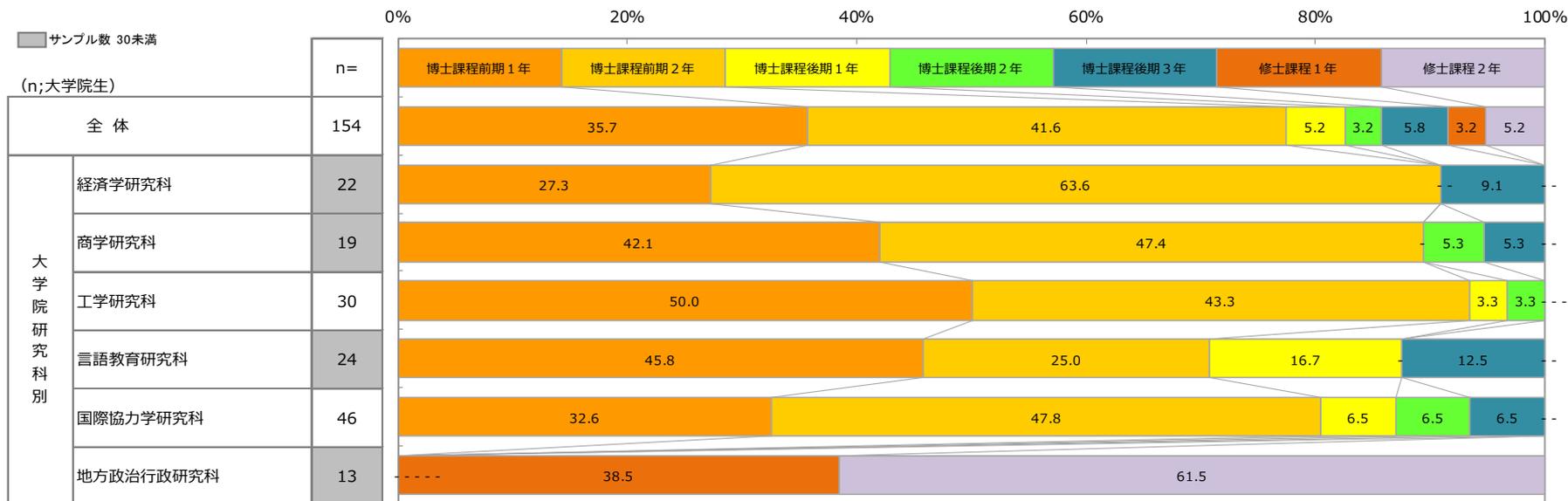
- ・学部生の学年は、「1年」が33.4%、「2年」が24.0%、「3年」が23.5%、「4年」が19.1%である。



学年（大学院生）

Q2SQ3.あなたの学年をお知らせください。（SA）

- ・大学院生の学年は、「博士課程前期2年」が41.6%、「博士課程前期1年」が35.7%である。「博士課程前期」が合計約8割を占める。



外国人留学生比率

Q3.あなたは外国人留学生ですか。(SA)

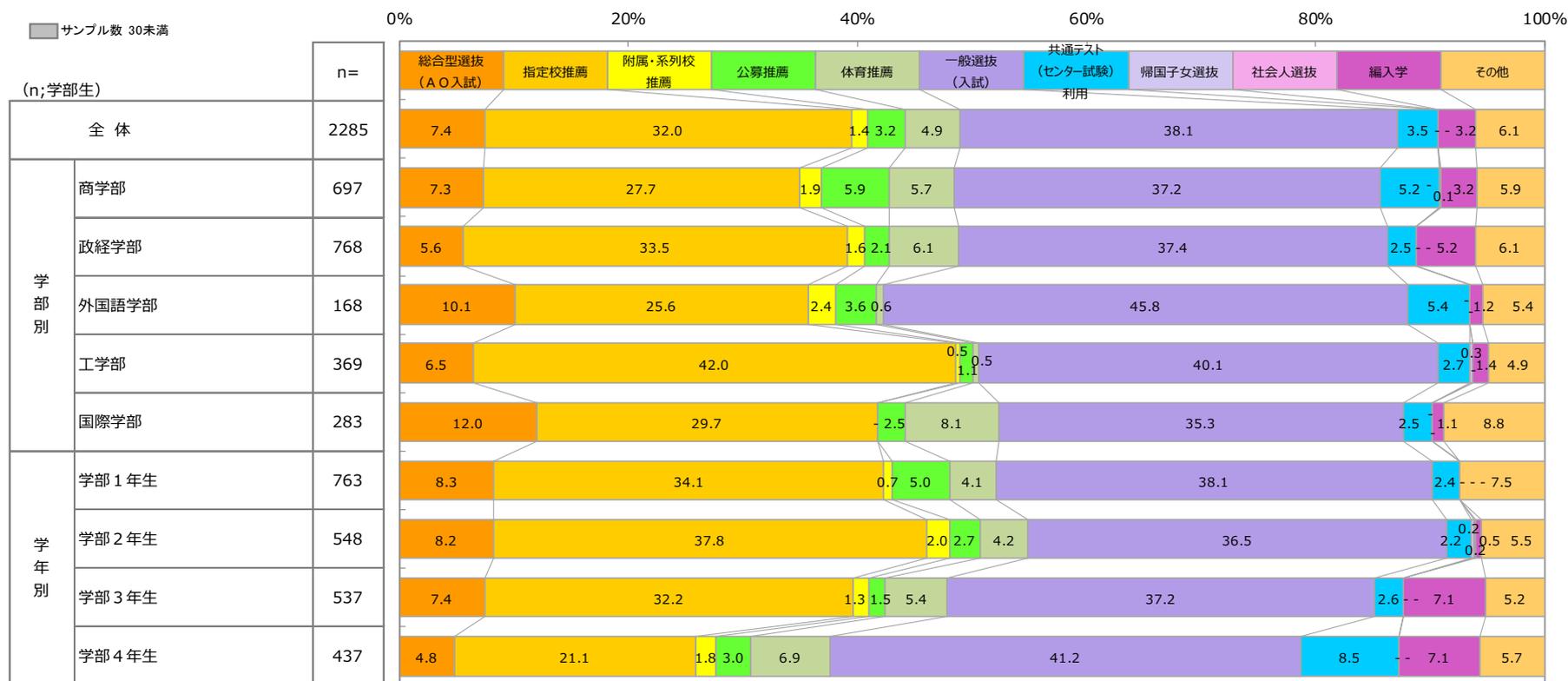
- 外国人留学生比率は、全体の18.4%で、学部生では国際学部（26.5%）、商学部（16.5%）、政経学部（15.0%）、外国語学部（10.1%）で10%以上である。
- 大学院生では60.4%と半数以上が外国人留学生である。



入試種類 (学部生)

Q4. 拓殖大学へはどのような選抜方法で入学しましたか。(SA)

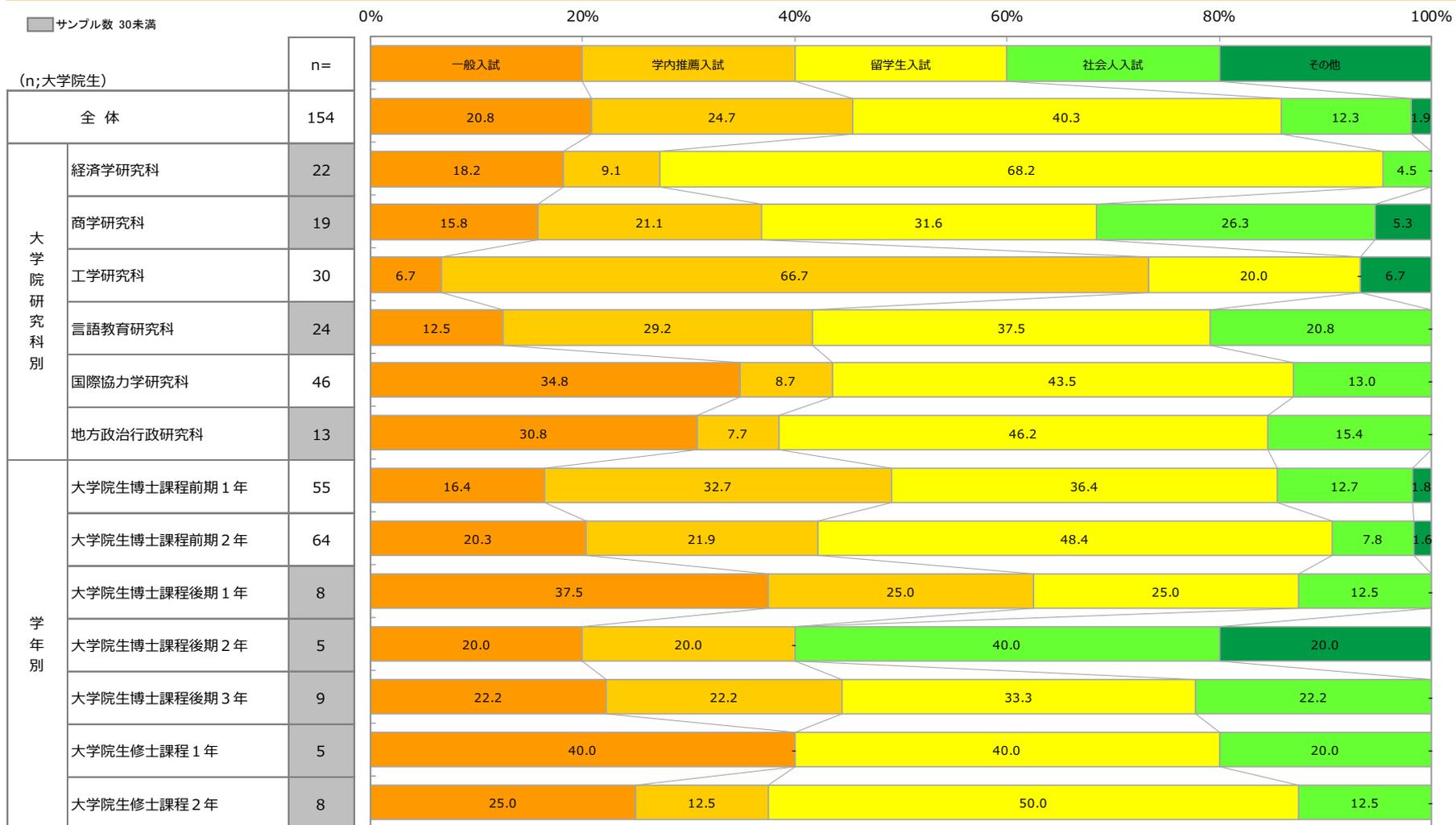
- 学部生の入試種類は、全体では「一般選抜(入試)」が38.1%で最も多く、「指定校推薦」が32.0%で続く。
- 学部別では、工学部で「指定校推薦」が「一般選抜」を上回る(+1.9pt)。他の学部では「一般選抜」が最も多い。
- 学年別では、学部2年生で「指定校推薦」が「一般選抜」を上回る(+1.3pt)。他の学年では「一般選抜」が最も多い。



入試種類 (大学院生)

Q5. 拓殖大学大学院へはどのような選抜方法で入学しましたか。(SA)

- ・ 大学院生の入試種類は、「留学生入試」が40.3%で最も多く、次いで「学内推薦入試」24.7%、「一般入試」20.8%と続く。

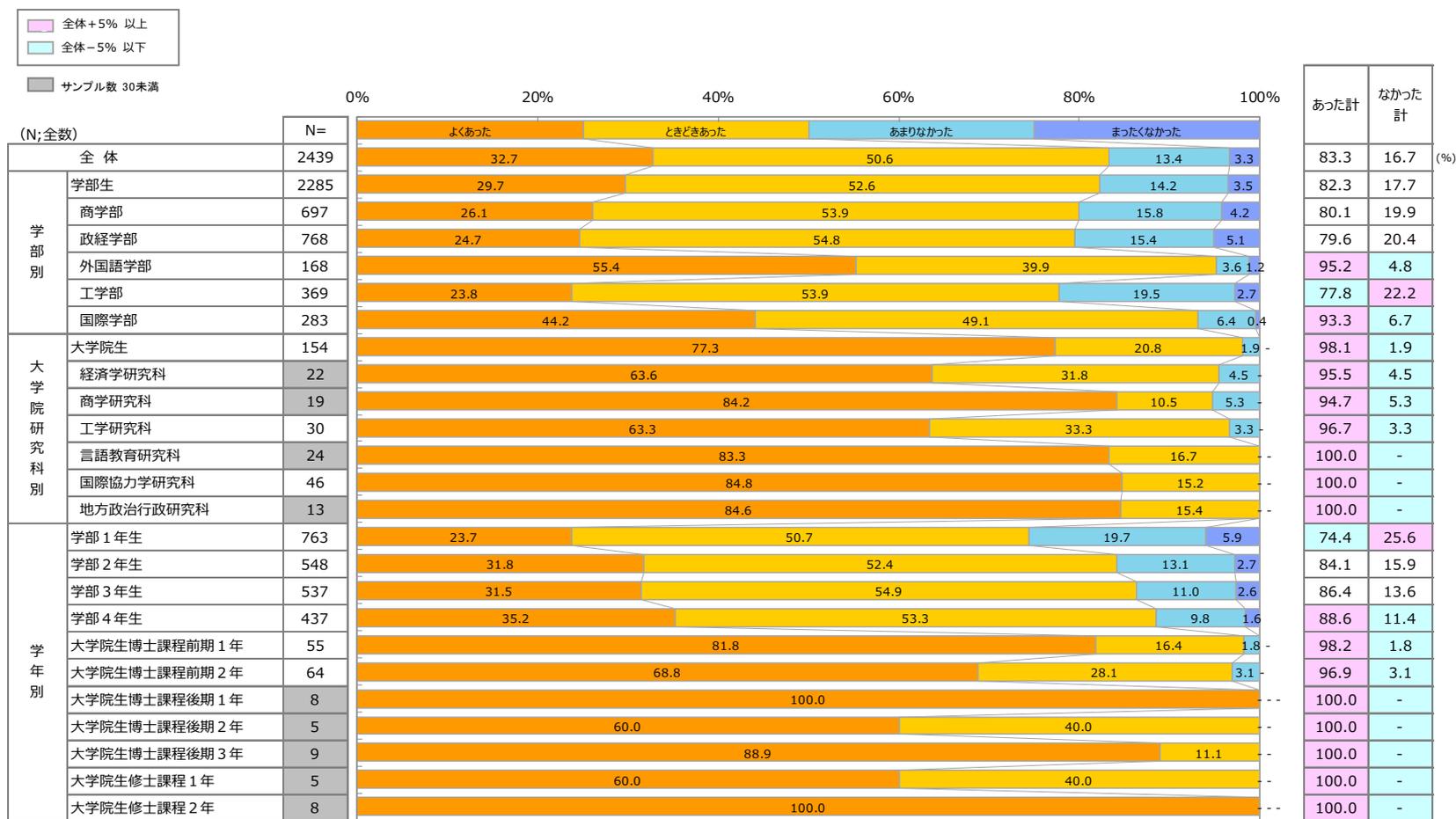


授業中での経験

自分の考えや課題を発表する授業有無

Q6.自分の考えや課題を発表する授業はありましたか。(SA)

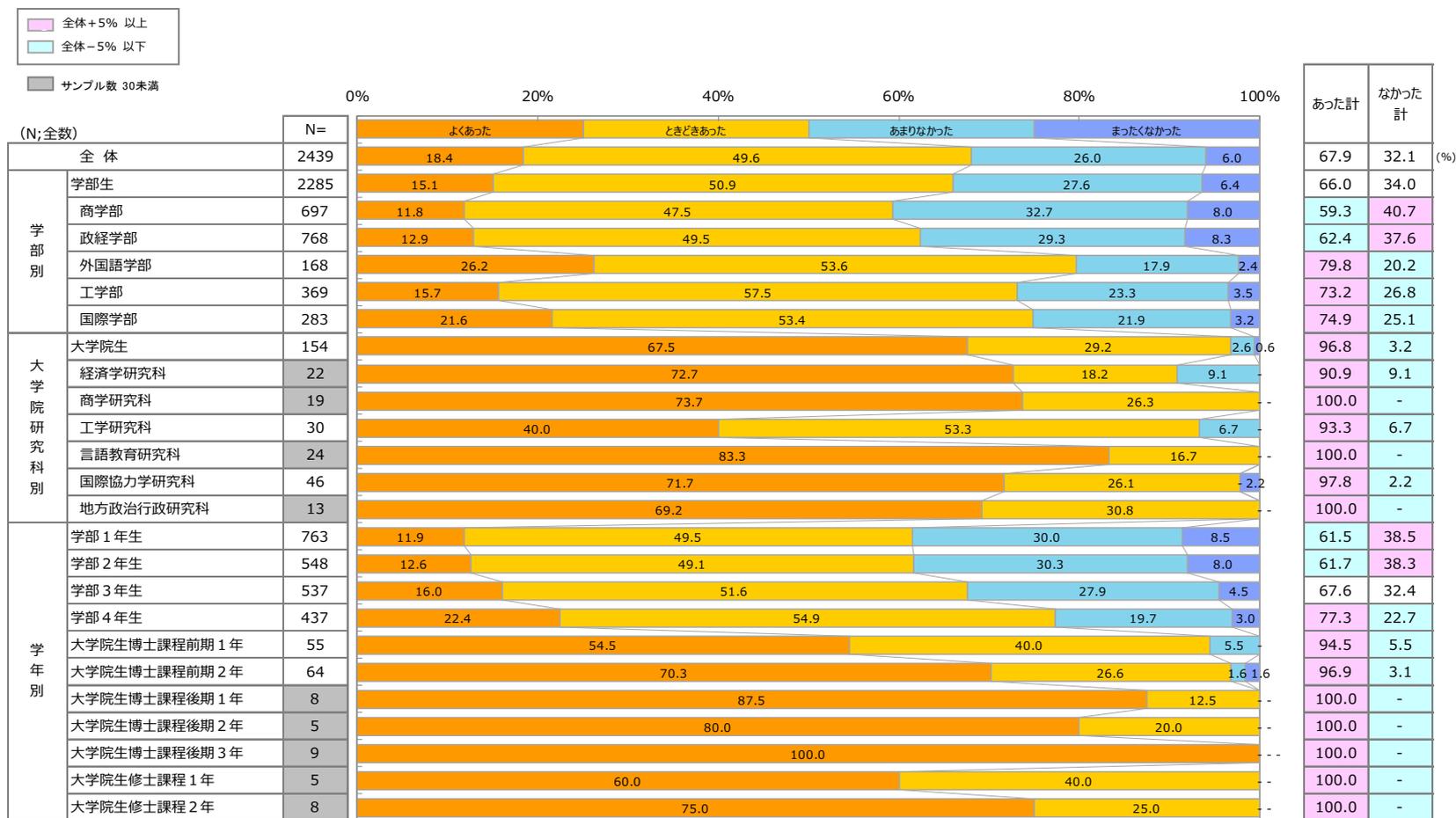
- ・自分の考えや課題を発表する授業が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の83.3%と、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の16.7%を大きく上回る。
- ・学部別では、各学部で「あった計」が「なかった計」を大きく上回る。「あった計」をみると、外国語学部が95.2%で最も高く、国際学部が93.3%で続く。また、大学院生は「あった計」が98.1%（全体より+14.8pt）に達する。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と学年が上がるにつれ「あった計」が上がる。



教員への質問・意見を述べたことの経験有無

Q7.教員に質問したり、意見を述べたことはありましたか。(SA)

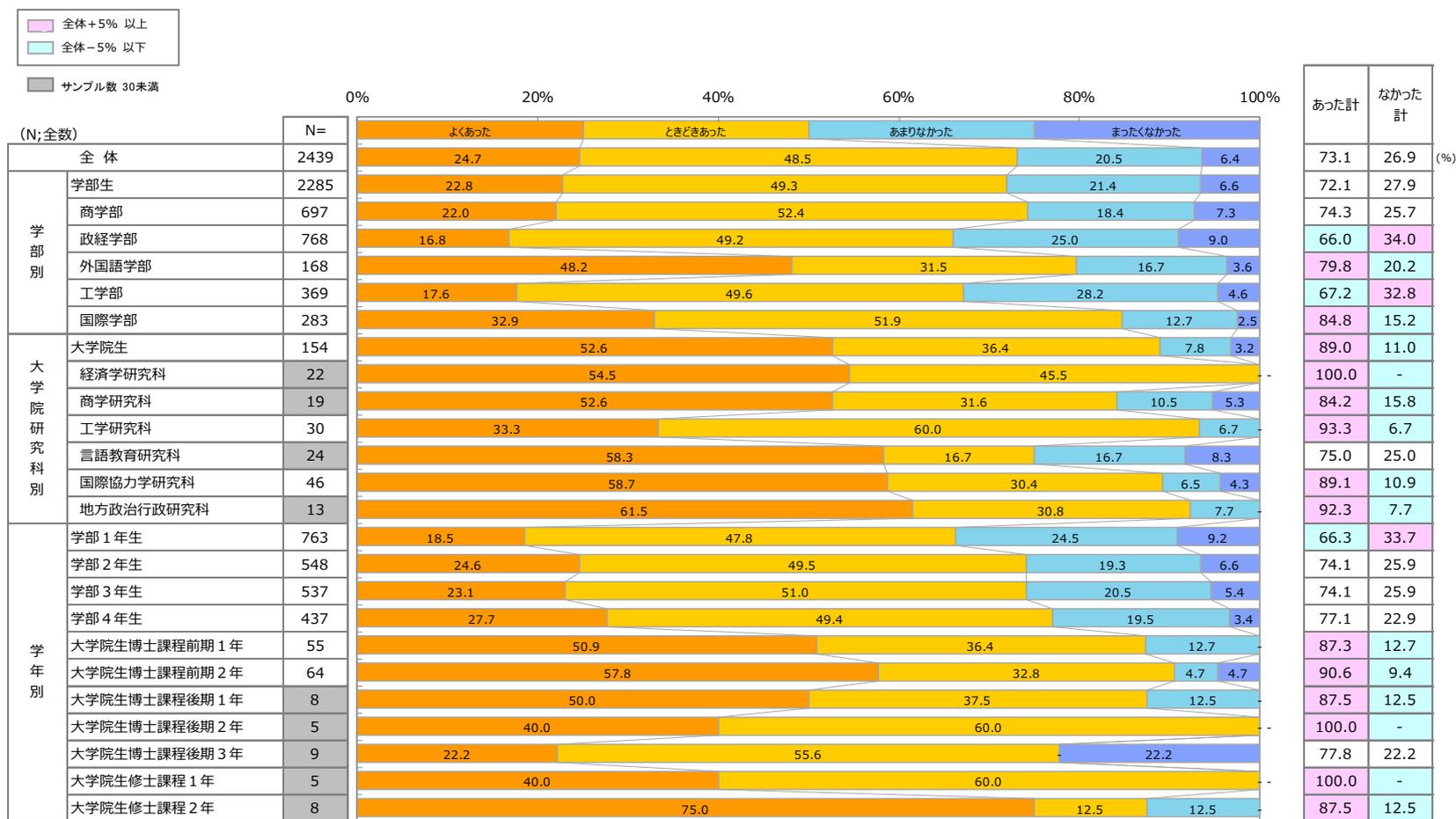
- ・教員への質問・意見を述べたことの経験が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の67.9%と、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の32.1%を上回る。
- ・学部別では、各学部で「あった計」が「なかった計」を上回る。なお、「なかった計」は、全体に比べ商学部、政経学部で5pt以上上回っている。「あった計」をみると、外国語学部が79.8%（全体より+11.9pt）で最も高く、国際学部が74.9%（全体より+7.0pt）で続く。また、大学院生は「あった計」が96.8%に達する。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と学年が上がるにつれ「あった計」が上がる。



学生同士が議論する授業有無

Q8.学生同士が議論する授業はありましたか。(SA)

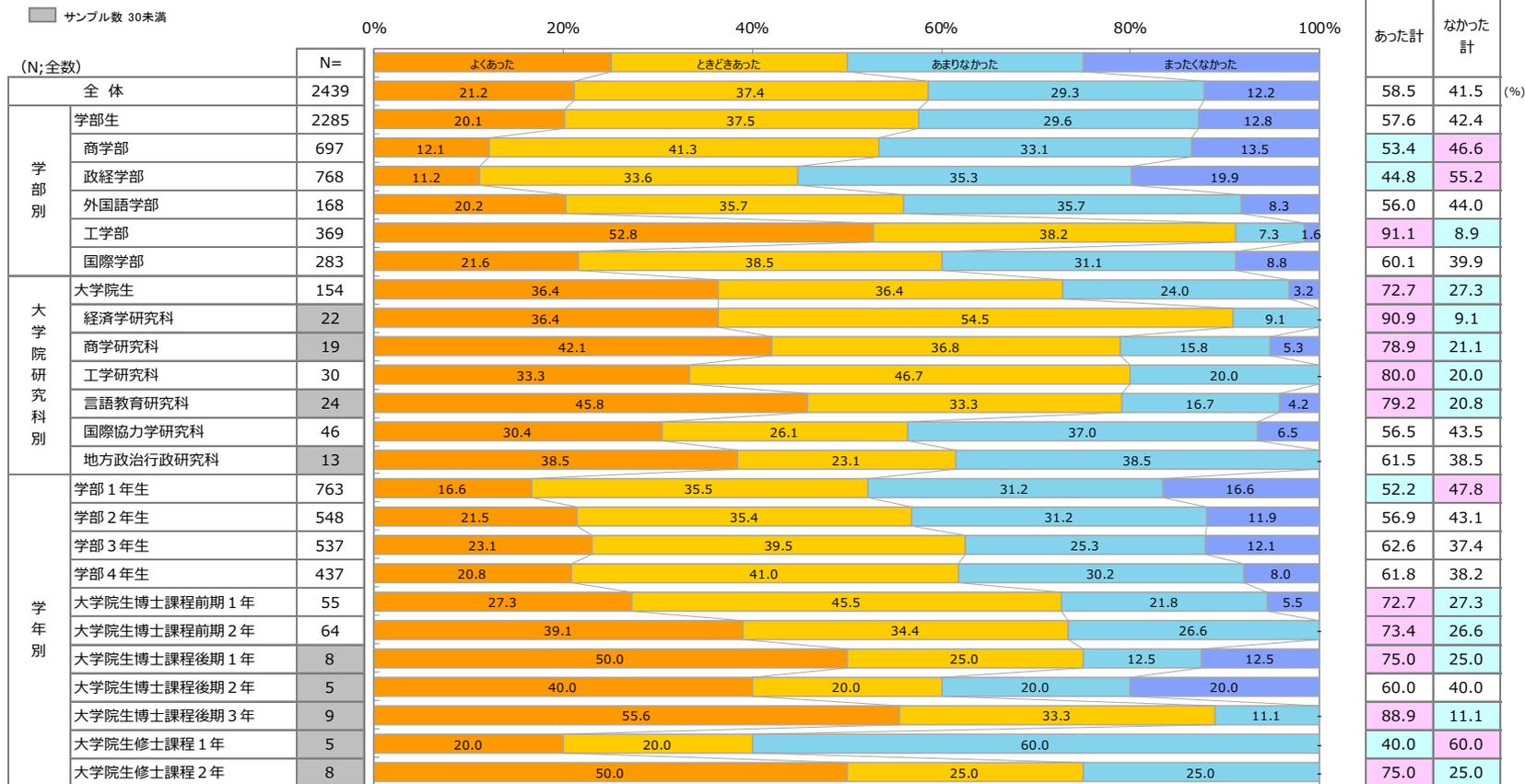
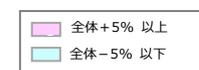
- ・学生同士が議論する授業が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の73.1%と、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の26.9%を上回る。
- ・学部別では、各学部で「あった計」が「なかった計」を上回る。なお、「なかった計」は、全体に比べ政経学部、工学部で5pt以上上回っている。「あった計」をみると、国際学部が84.8%（全体より+11.7pt）で最も高く、外国語学部が79.8%（全体より+6.7pt）で続く。また大学院生は「あった計」が89.0%。
- ・学年別で学部生の「あった計」をみると、4年生が77.1%で最も高く、続いて2、3年生の74.1%となった。



演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業有無

Q9.演習、実験、実習、フィールドワークなどを通して体験する授業はありましたか。(SA)

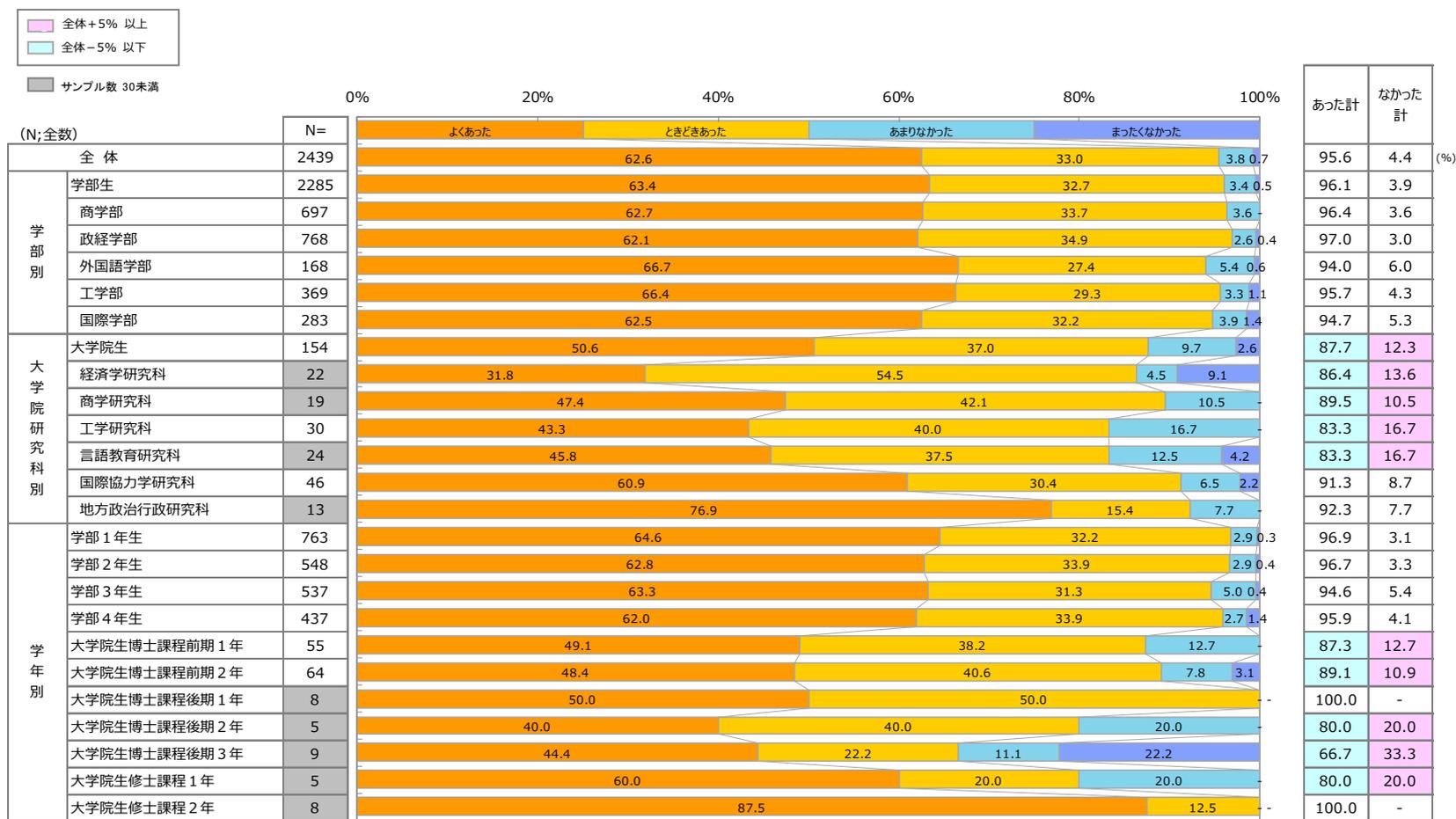
- ・演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の58.5%で、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の41.5%を上回る。
- ・学部別では、政経学部以外の各学部で「あった計」が「なかった計」を上回る。政経学部では「あった計」が44.8%なのに対し、「なかった計」が55.2%であった。「あった計」をみると、工学部が91.1%（全体より+32.6pt）で最も高く、国際学部が60.1%（全体より+1.6pt）で続く。また大学院生は「あった計」が72.7%。
- ・学年別で学部生の「あった計」をみると、3年生が62.6%で最も高く、続いて4年生の61.8%となった。



定期的な小テスト・レポートのある授業有無

Q10.定期的に小テストやレポートが課せられた授業はありましたか。(SA)

- 定期的な小テスト・レポートのある授業が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の95.6%に達した。
- 各学部をみても「あった計」は95%前後と大きな差はみられない。
また、大学院生の「あった計」は87.7%。
- 学年別で学部生の「あった計」をみると、1年生が96.9%で最も高く、続いて2年生の96.7%となった。



Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業の有無

Q11.Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業はありましたか。(SA)

- Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の98.1%に達した。
- 各学部をみても「あった計」は90%台後半と大きな差はみられない。また、大学院生の「あった計」は94.2%。
- 学年別で学部生をみると、わずかな差ではあるが、学年が下がるにつれて「あった計」は上がる。

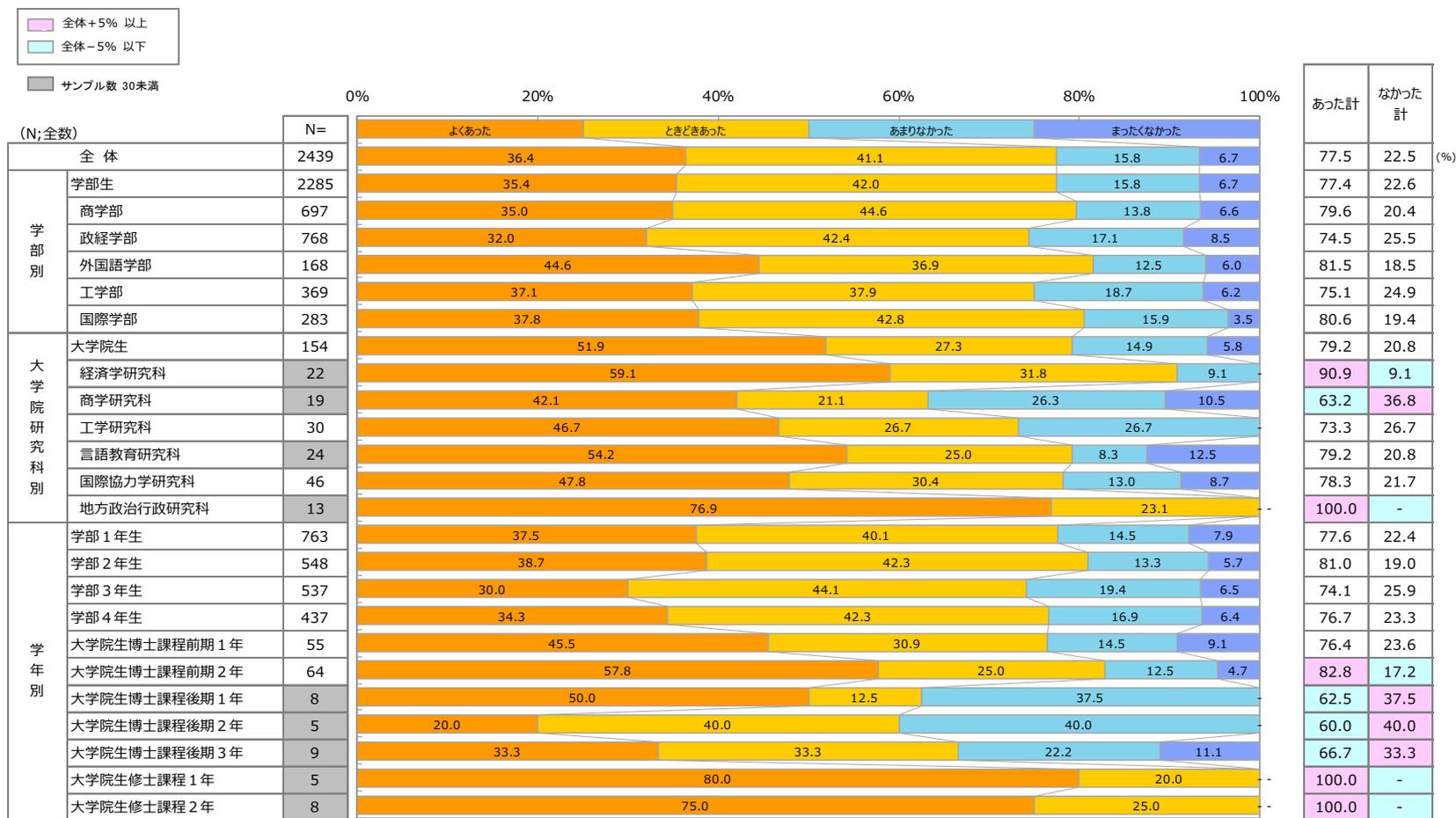


授業時間外の学修態度

他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験有無

Q12.他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強したことがありますか。(SA)

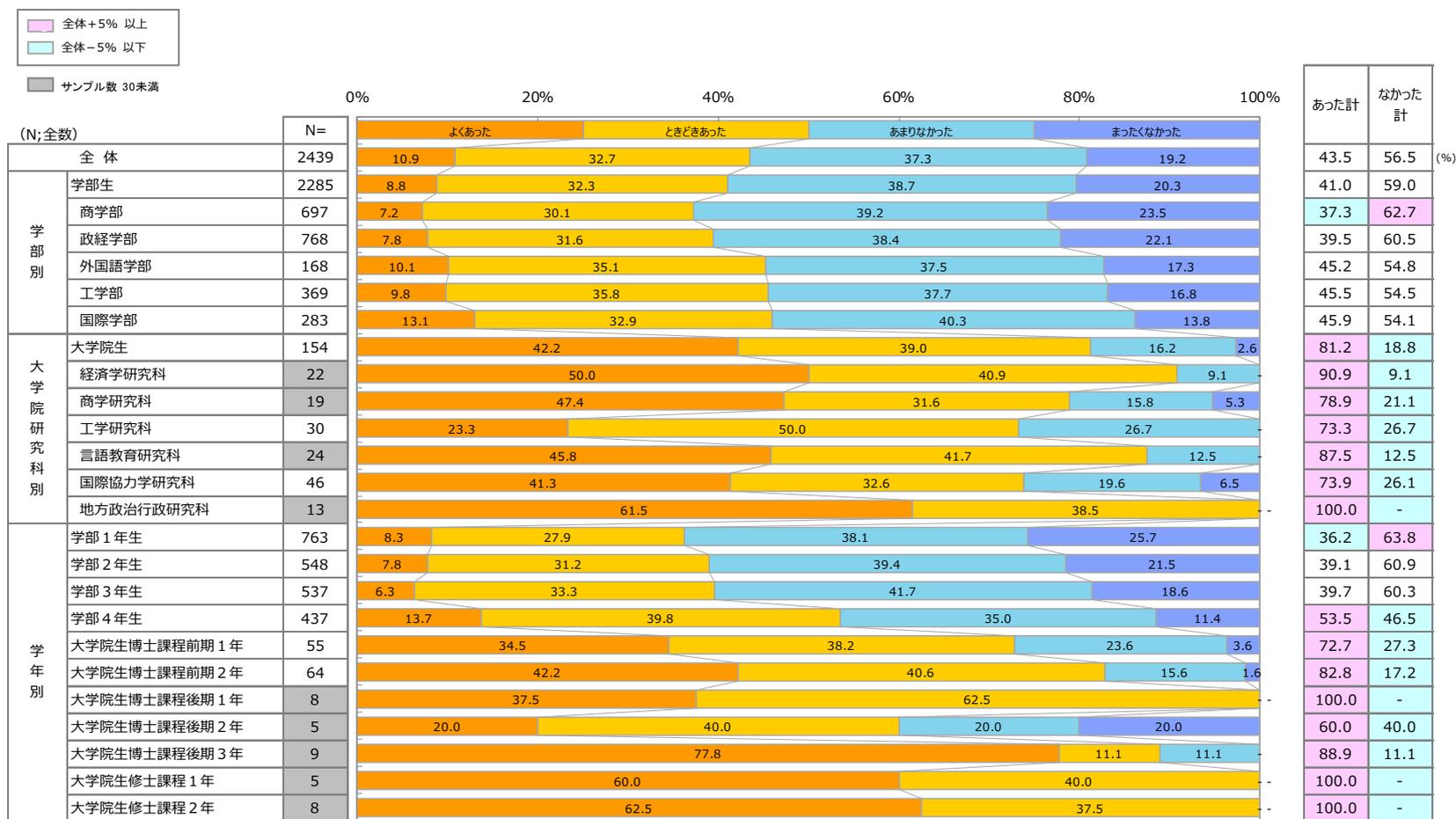
- 他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の77.5%と、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の22.5%を上回る。
- 学部別では、各学部で「あった計」が「なかった計」を上回る。「あった計」をみると、外国語学部が81.5%で最も高い。大学院生は「あった計」が79.2%。
- 学年別で学部生の「あった計」をみると、2年生が81.0%で最も高く、1年生の77.6%と続く。



教職員への学修に関する相談経験有無

Q13.教職員に学修に関する相談をしたことがありましたか。(SA)

- ・教職員への学修に関する相談経験が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の43.5%と、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の56.5%を下回る。
- ・学部別では、学部生は全ての学部で「あった計」が「なかった計」を下回る。「あった計」をみると、国際学部が45.9%で最も高い。大学院生は「あった計」が81.2%と、学部生よりも高い。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「あった計」が上がる。学部4年生は「あった計」が53.5%と半数を超えている。



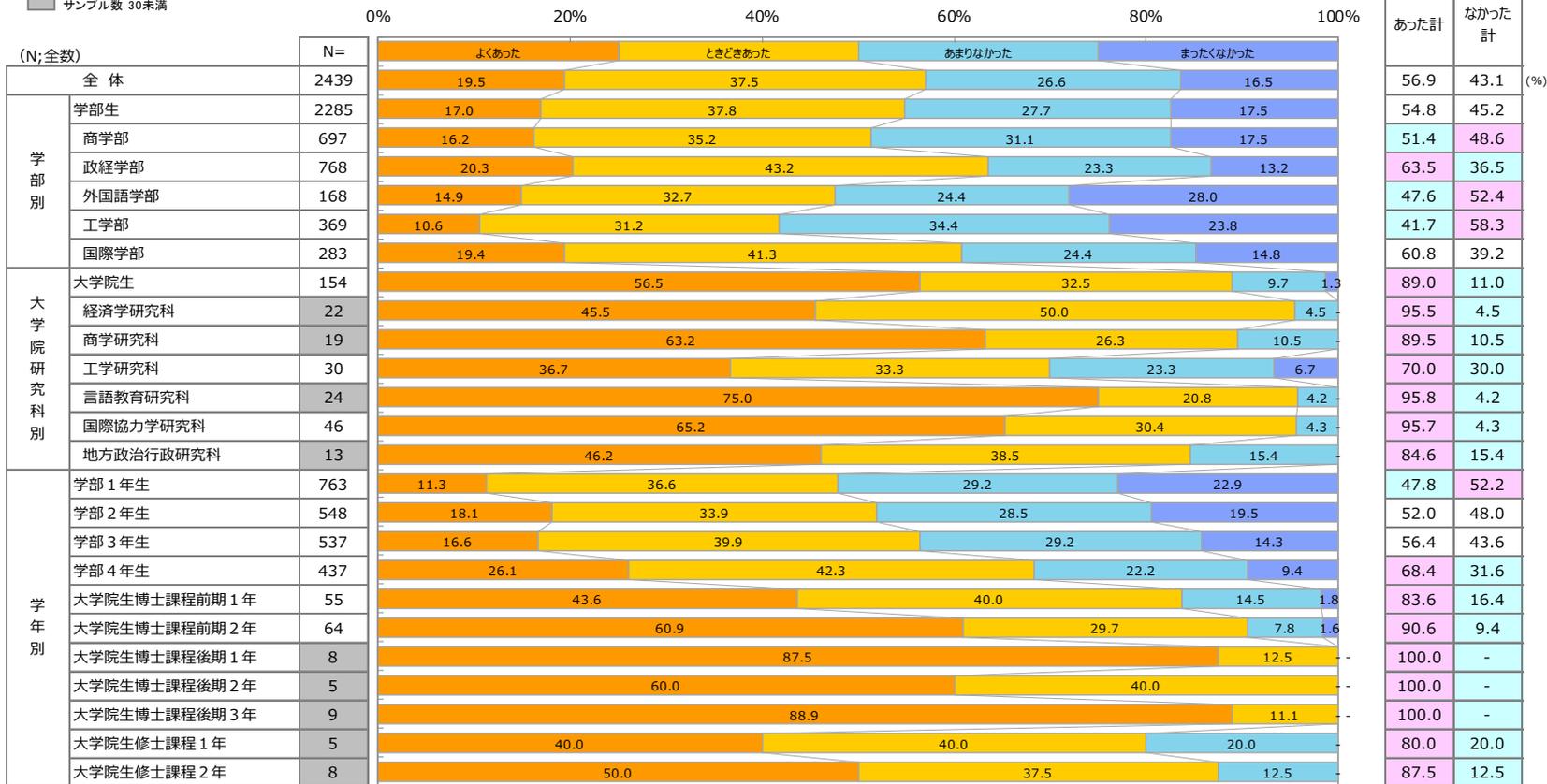
授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験の有無

Q14.授業や課題のために図書館で資料・文献を調べたことがありましたか。(SA)

- ・授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の56.9%と、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の43.1%を上回る。
- ・学部別では、商学部、政経学部、国際学部で「あった計」が「なかった計」を上回る。「あった計」をみると、政経学部が63.5%（全体より+6.6pt）で最も高い。大学院生は「あった計」が89.0%に達する。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「あった計」が上がる。



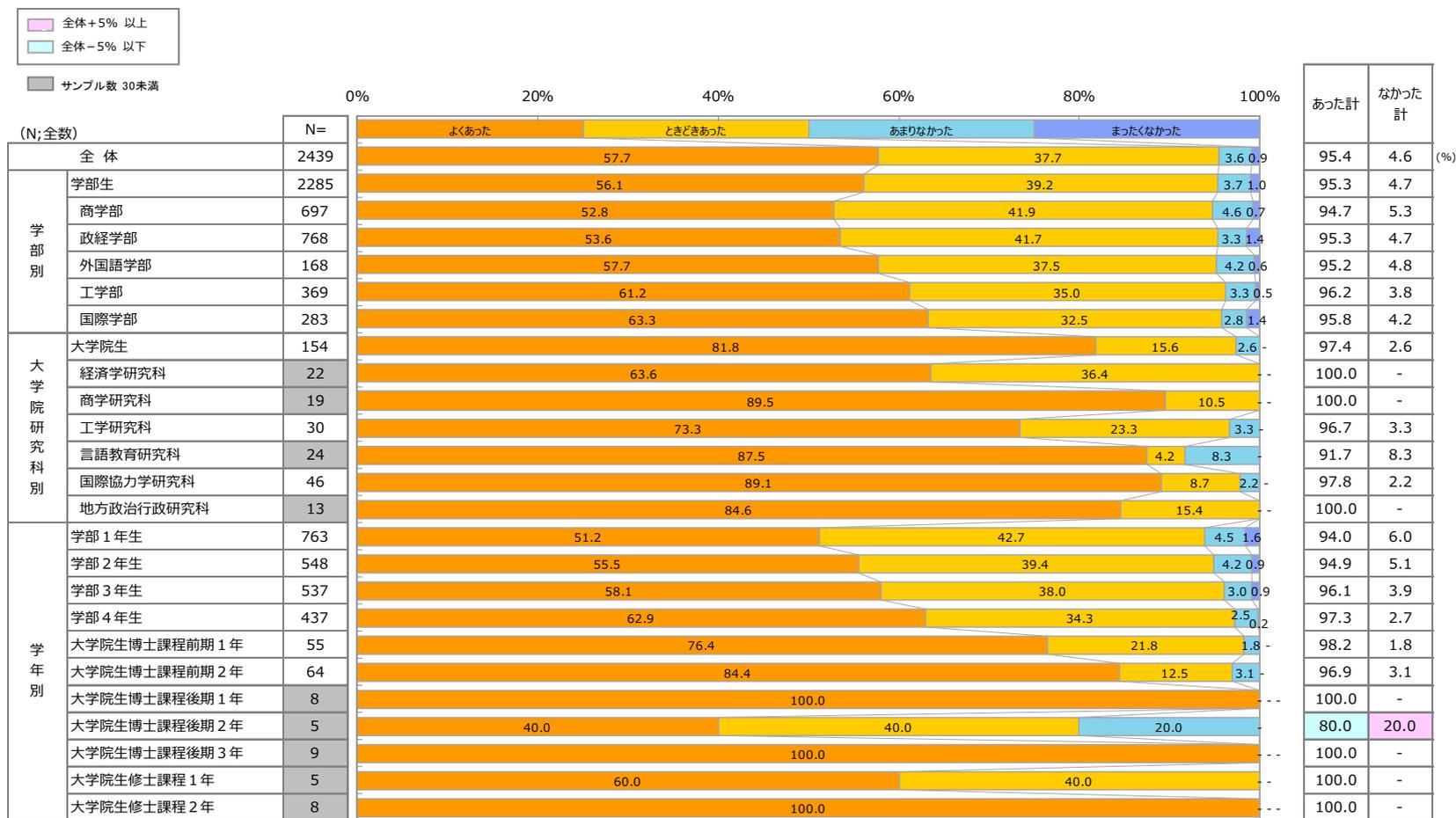
■ サンプル数 30未満



授業や課題のためインターネットでの情報収集経験有無

Q15.授業や課題のためにインターネットで情報を集めたりしたことがありますか。(SA)

- ・授業や課題のためインターネットでの情報収集経験が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の95.4%に達している。
- ・各学部をみても「あった計」は95%前後と大きな差はみられない。大学院生は「あった計」が97.4%という結果になった。
- ・学年別でみると、わずかな差ではあるが、学部1年生から4年生と学年が上がるにつれ「あった計」が上がる。

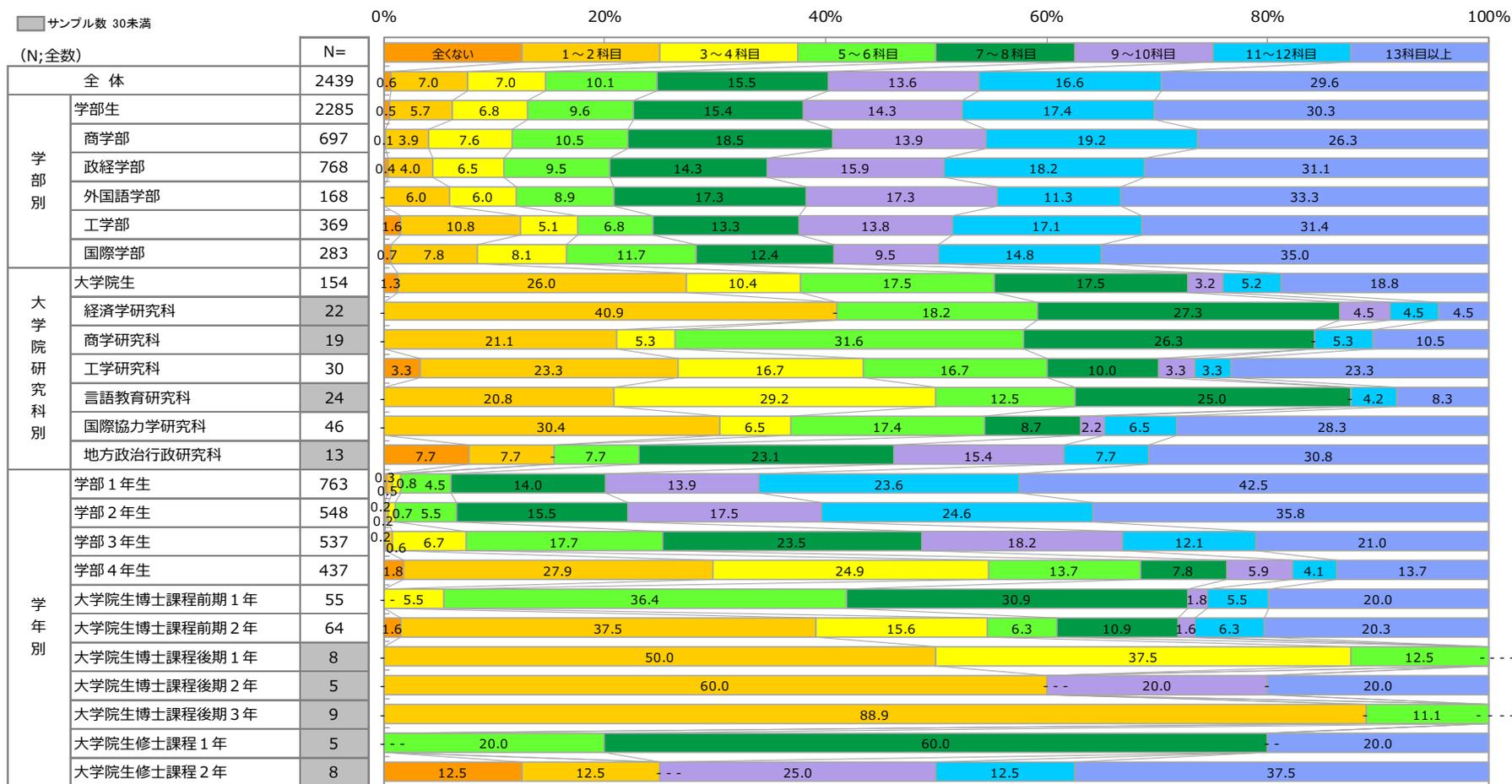


**本年度の週当たりの
学修等時間**

週当たりの授業出席科目数

Q16.どの程度授業に出席しましたか。(SA)

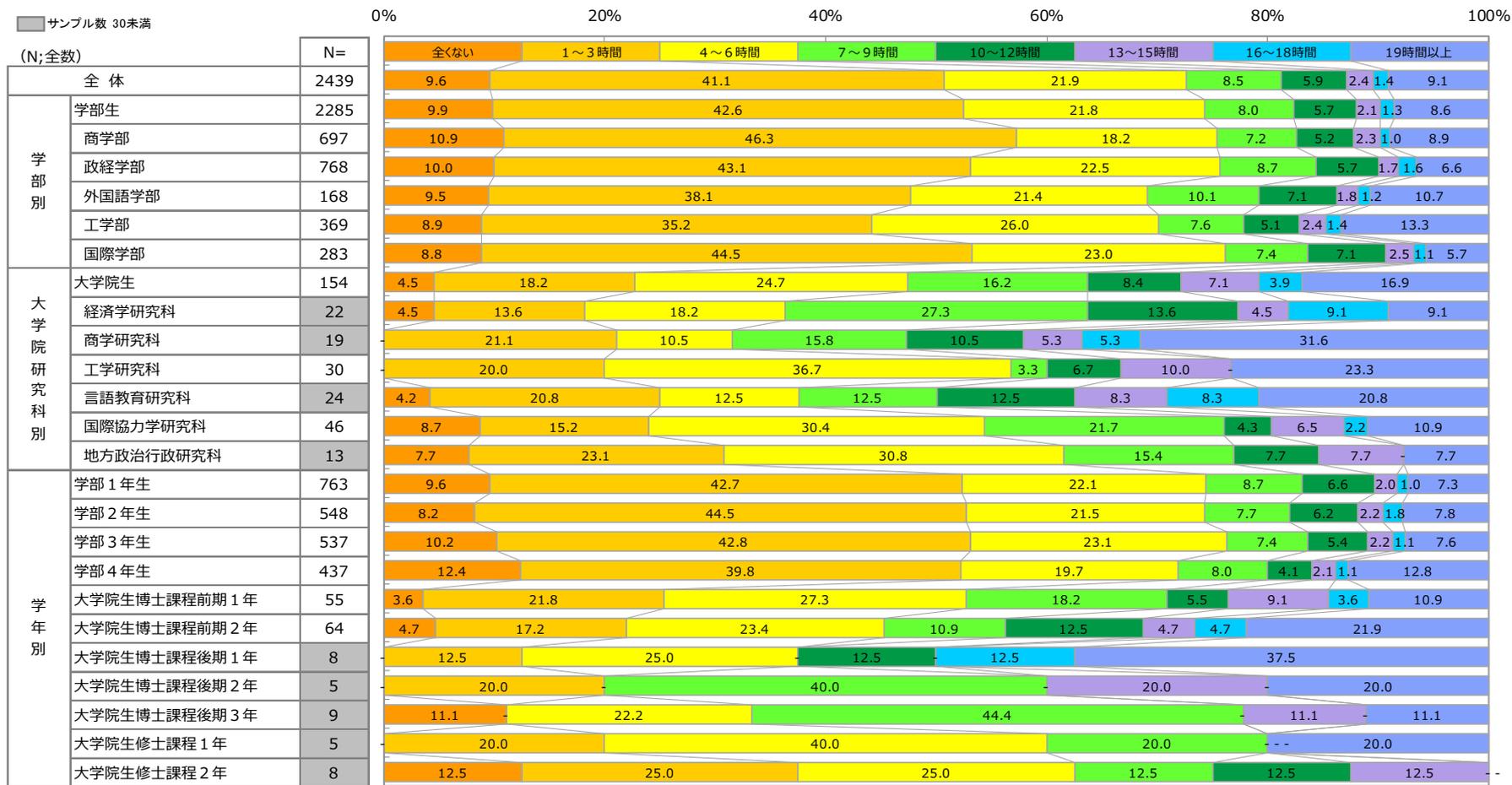
- ・週当たりの授業出席科目数は「13科目以上」が全体の29.6%で最も多い。「11～12科目」が16.6%、「7～8科目」が15.5%で続く。
- ・学部別では、全ての学部で「13科目以上」が最も多く、国際学部が35.0%で最も高い。大学院生は「1～2科目」(26.0%)が最も多く、以降、「13科目以上」(18.8%)、「5～6科目」「7～8科目」(ともに17.5%)と続く。
- ・学年別で学部生をみると、1年生、2年生は「13科目以上」が最も多い。3年生では「7～8科目」が23.5%、4年生では「1～2科目」が27.9%で最も多い。



週当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験時間

Q17.授業時間以外に授業と関連した学修や経験をどの程度しましたか。(SA)

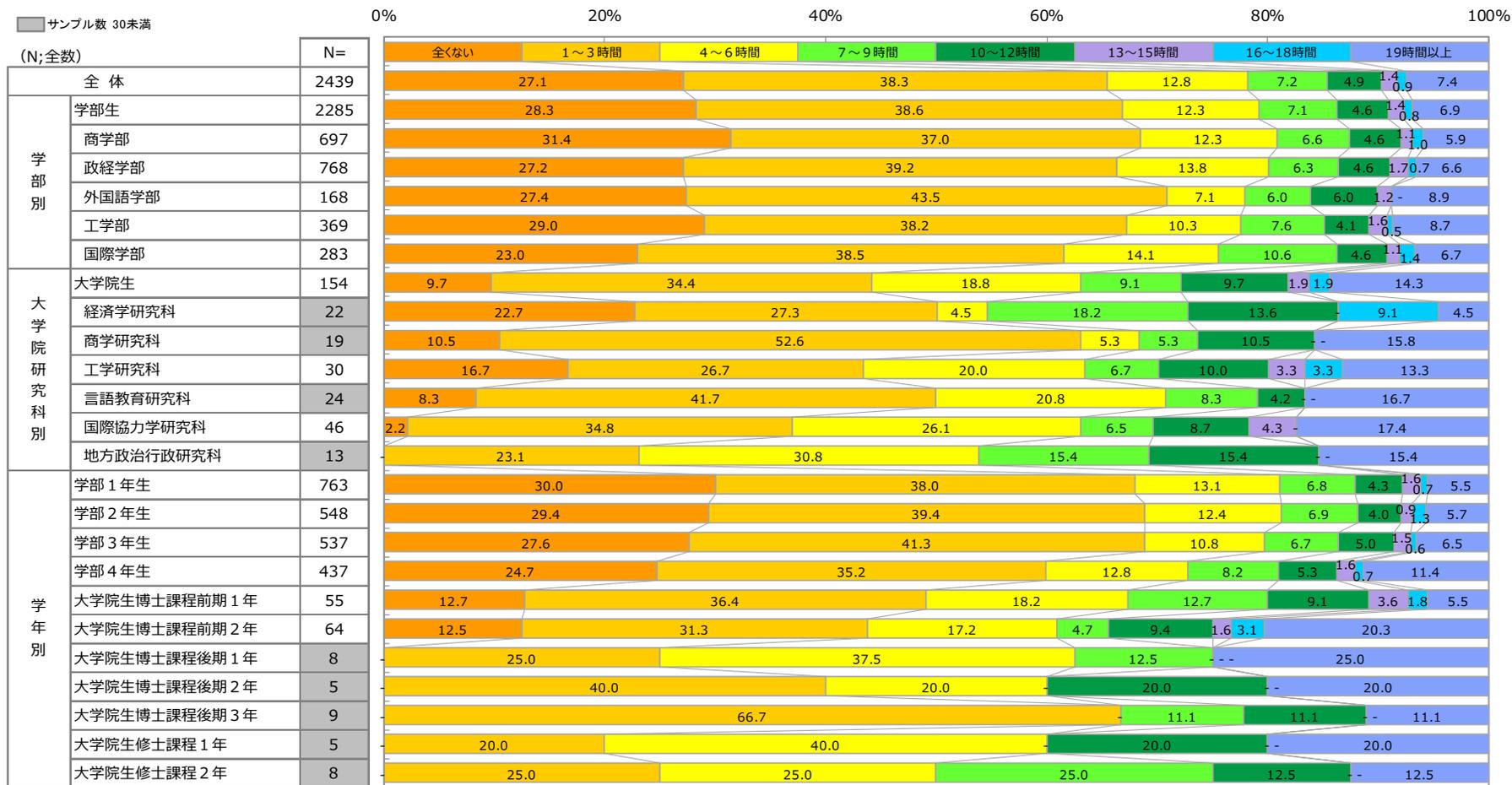
- ・週当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験時間は全体でみると、「1～3時間」が41.1%で最も多い。以降、「4～6時間」が21.9%、「19時間以上」が9.1%で続く。なお「全くない」は9.6%。
- ・学部別では、全ての学部で「1～3時間」が最も多く、商学部が46.3%で最も高い。なお、工学部（13.3%）、外国語学部（10.7%）では「19時間以上」が10%以上。大学院生は「4～6時間」が24.7%で最も多い（全体より+2.8pt）。
- ・学年別では、学部1年生から4年生までどの学年でも「1～3時間」が最も多い。



週当たりの授業と関連しない読書時間

Q18.授業と関連しない読書をどの程度しましたか（マンガ・雑誌を除く）。（SA）

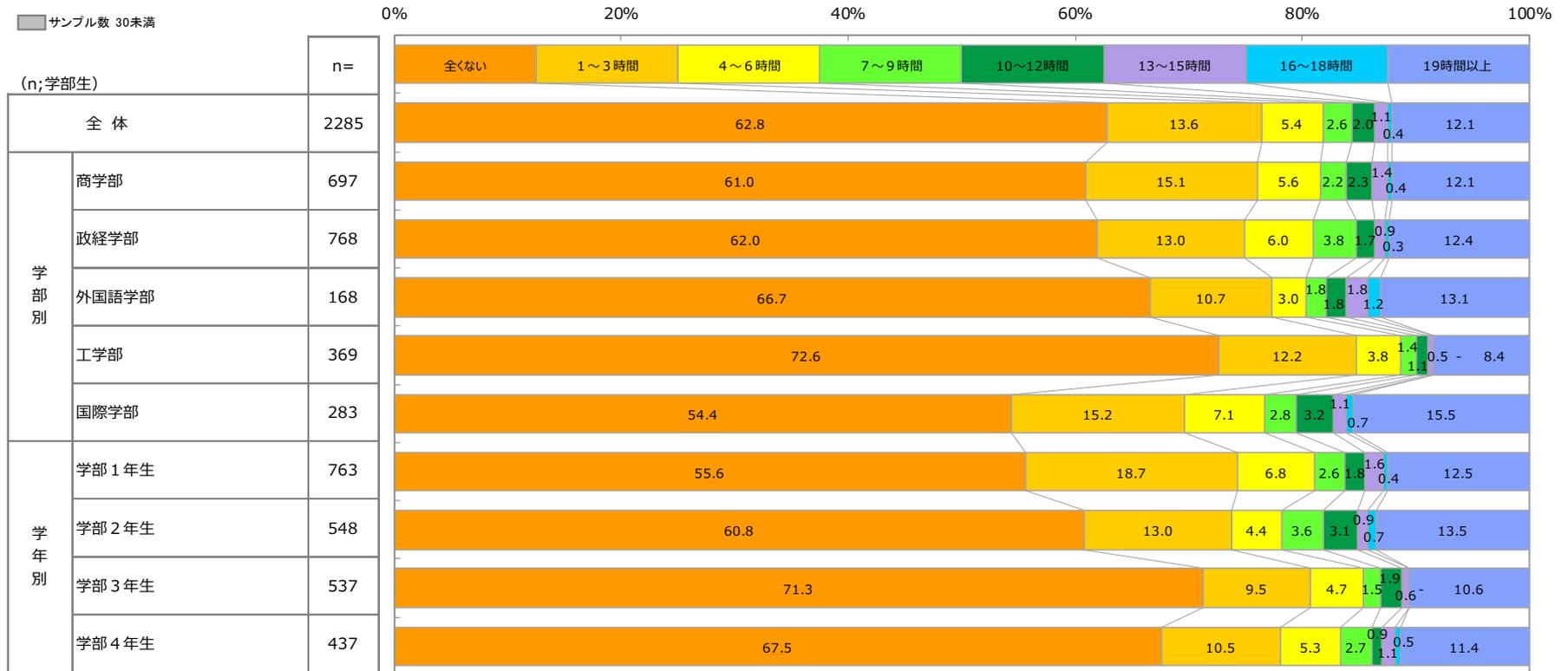
- ・週当たりの授業と関連しない読書時間は全体でみると、「1～3時間」が38.3%で最も多い。
- ・学部別で、1時間以上の合計をみると、国際学部（77.0%）が最も時間を割いており、政経学部（72.9%）が続く。各学部で「1～3時間」は外国語学部（43.5%）が最も高い。
- ・大学院生も「1～3時間」（34.4%）が最も多いが、「4～6時間」が18.8%、「19時間以上」が14.3%と、学部生より時間を割いていることが窺える。
- ・学年別では、学部1年生から4年生までどの学年でも「1～3時間」が最も多い。



週当たりの部活動・サークル活動参加時間

Q19.どの程度部活動やサークル活動に参加しましたか。(SA)

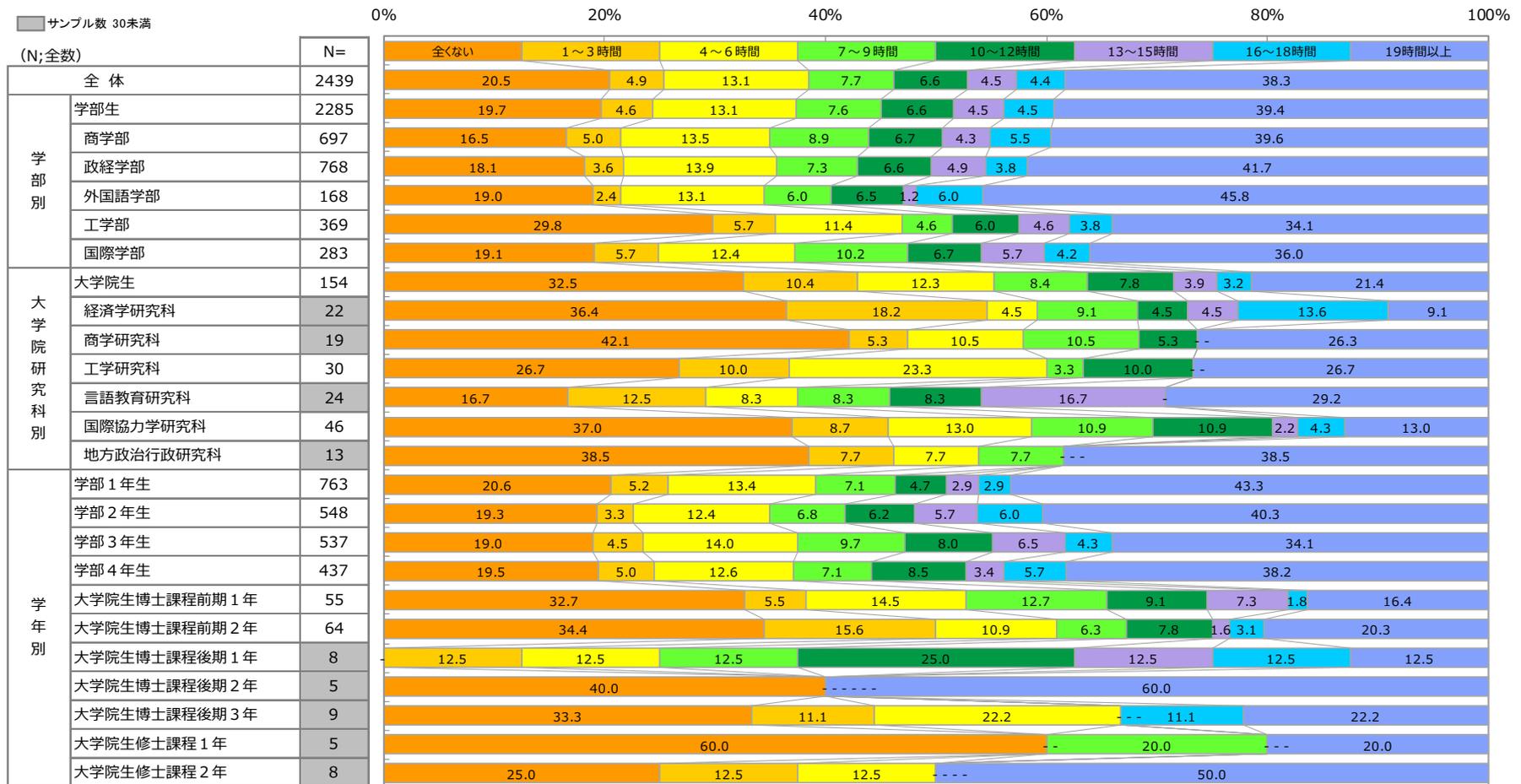
- ・学部生の週当たりの部活動・サークル活動参加時間は全体で見ると、「全くない」を除いて、「1～3時間」が13.6%で最も多い。「19時間以上」が12.1%で続く。
- ・学部別で、1時間以上の合計をみると、国際学部（45.6%）が最も時間を割いており、商学部（39.1%）が続く。「1～3時間」が多いのは、商学部（15.1%）、政経学部（13.0%）、工学部（12.2%）。「19時間以上」が多いのは、国際学部（15.5%）、外国語学部（13.1%）。
- ・学年別で学部生をみると、1年生の1時間以上の部活動・サークル活動の参加が最も多く（44.4%）、2年生（39.2%）と続く。最も低いのは3年生（28.8%）。



週当たりのアルバイト・就労時間

Q20.どの程度アルバイトや仕事をしましたか。(SA)

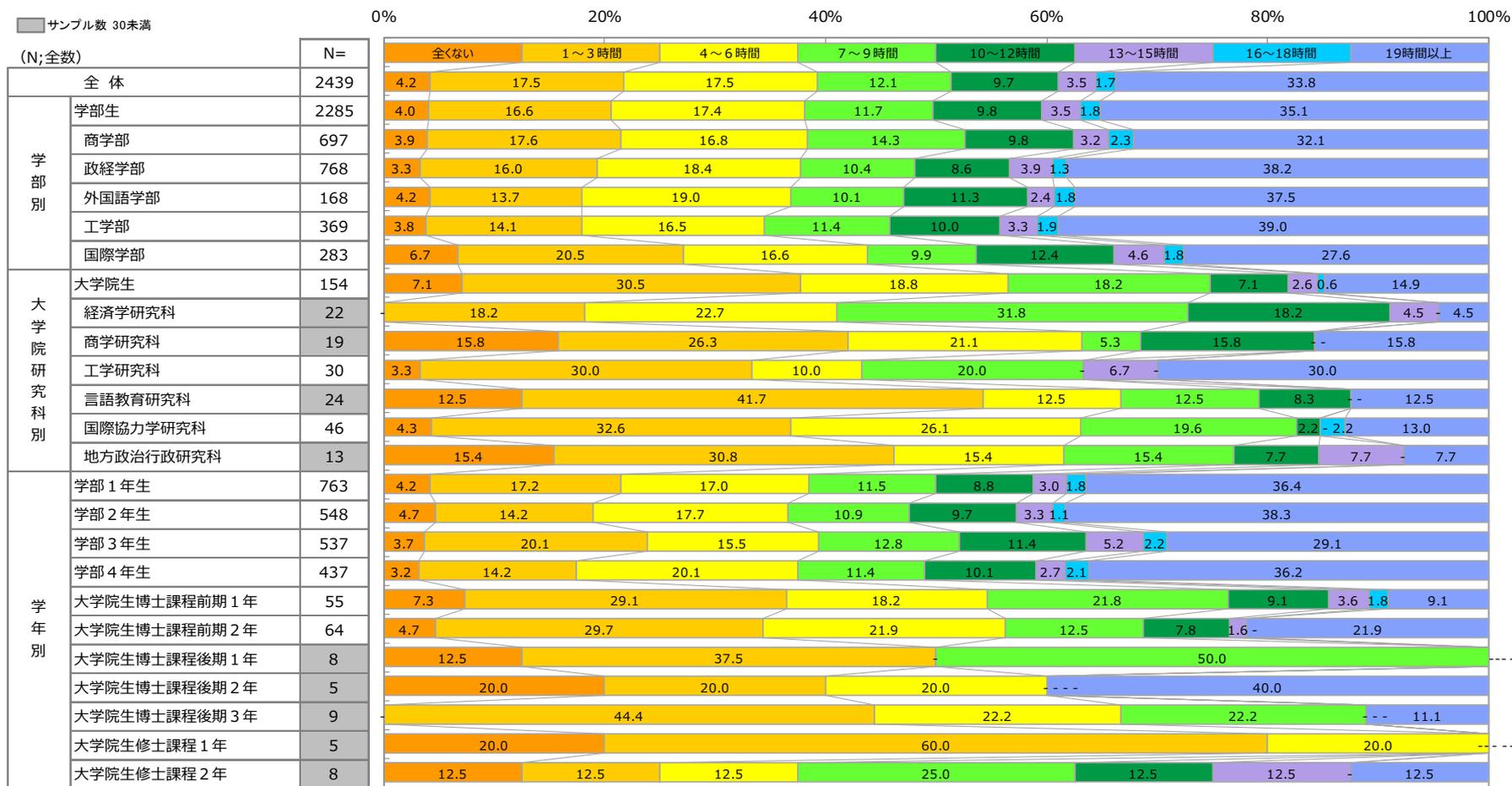
- ・週当たりのアルバイト・就労時間は全体でみると、「19時間以上」が38.3%で最も多い。「4～6時間」が13.1%、「7～9時間」が7.7%で続く（「全くない」を除く）。
- ・学部別で、1時間以上の合計をみると、商学部（83.5%）が最も時間を割いており、政経学部（81.8%）、外国語学部（81.0%）が続く。
学部生は全ての学部で「19時間以上」が最も多く、外国語学部（45.8%）、政経学部（41.7%）、商学部（39.6%）、国際学部（36.0%）、工学部（34.1%）の順で高い。
大学院生も、「全くない」を除いて「19時間以上」が21.4%で最も多い。
- ・学年別では、学部1年生から4年生までどの学年でも「19時間以上」が最も多い。



週当たりの個人的な趣味活動時間

Q21.どの程度個人的な趣味活動をしましたか。(SA)

- ・週当たりの個人的な趣味活動時間は全体で見ると、「19時間以上」が33.8%で最も多い。「1～3時間」「4～6時間」がともに17.5%、「7～9時間」が12.1%で続く。
- ・学部別で、1時間以上の合計をみると、学部間での差はさほどない（いずれも90%台）。学部生は全ての学部で「19時間以上」が最も多い。大学院生は「1～3時間」が30.5%で最も多い。
- ・学年別では、学部1年生から4年生までどの学年でも「19時間以上」が最も多い。

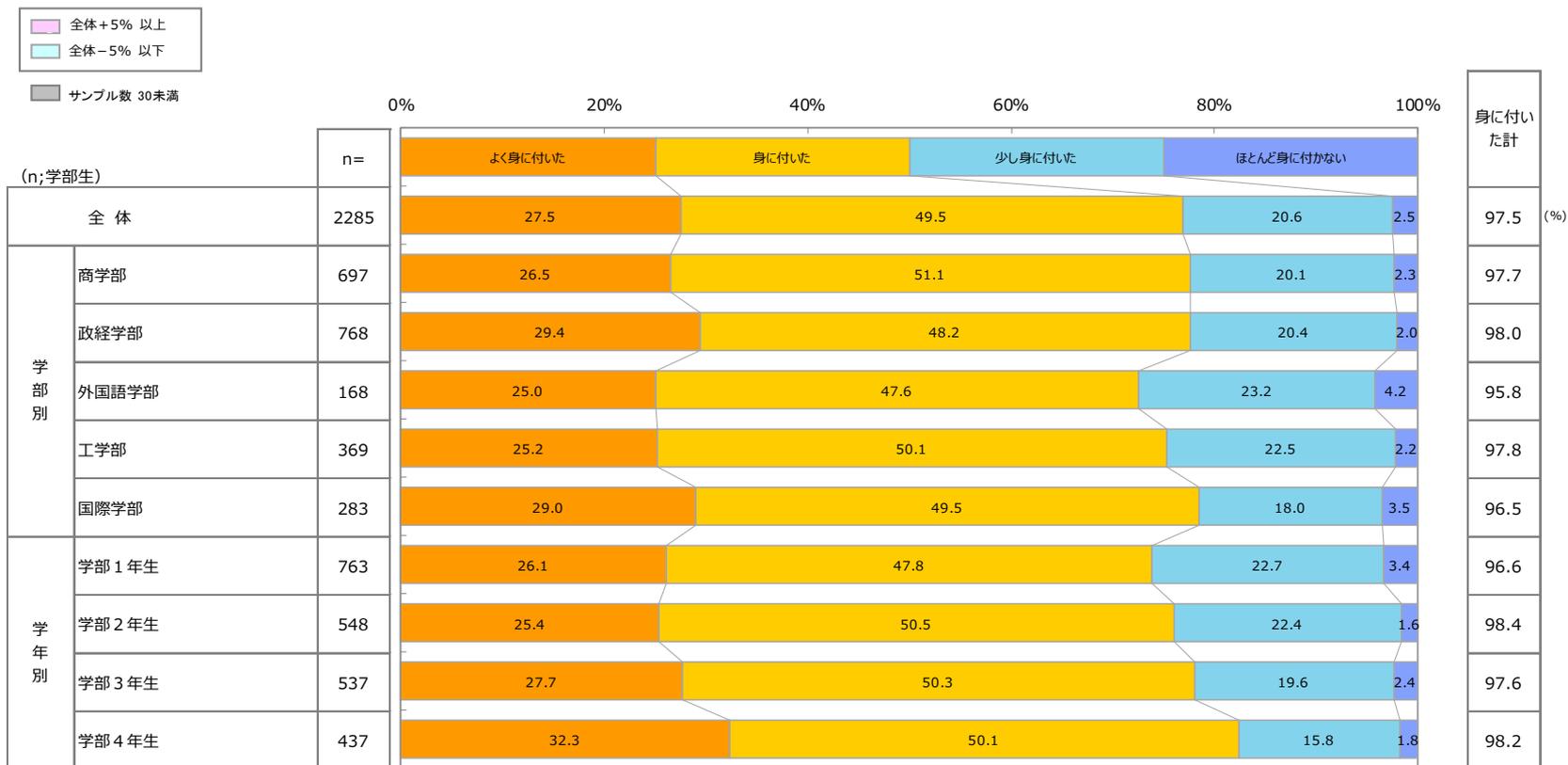


入学時と比べ、身に付いた
学修成果・経験

一般的な教養

Q22.一般的な教養が身に付きましたか。(SA)

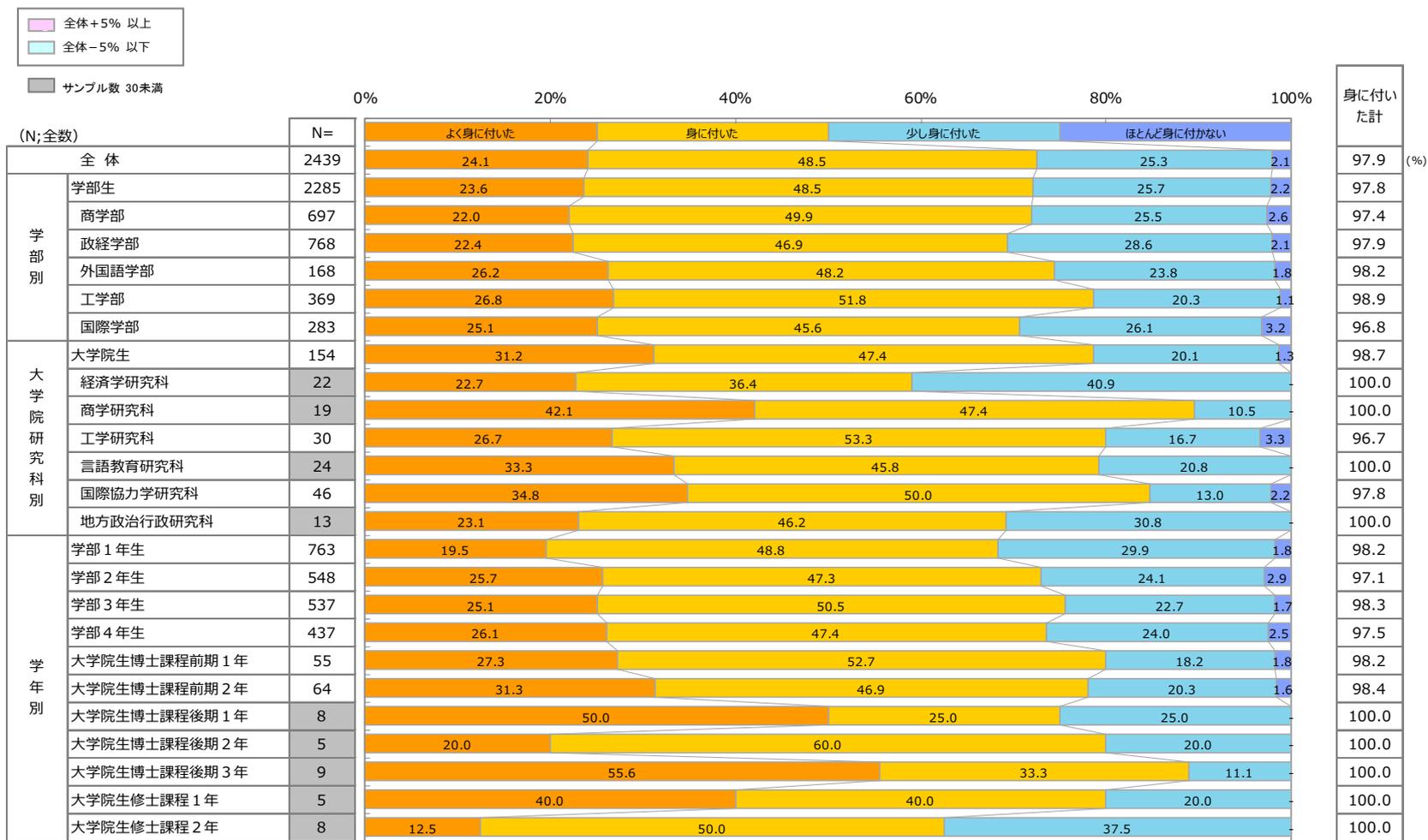
- ・学部生の一般的な教養の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の97.5%に達し、「よく身に付いた」は27.5%となった。
- ・学部別では、各学部で「身に付いた計」が95%以上。
「よく身に付いた」をみると、政経学部が29.4%で最も高く、国際学部が29.0%、商学部が26.5%と続く。
- ・学年別では、「よく身に付いた」は学部生の中では4年生が32.3%と最も高い。



専門分野に関する知識・技能

Q23.専門分野に関する知識・技能が身に付きましたか。(SA)

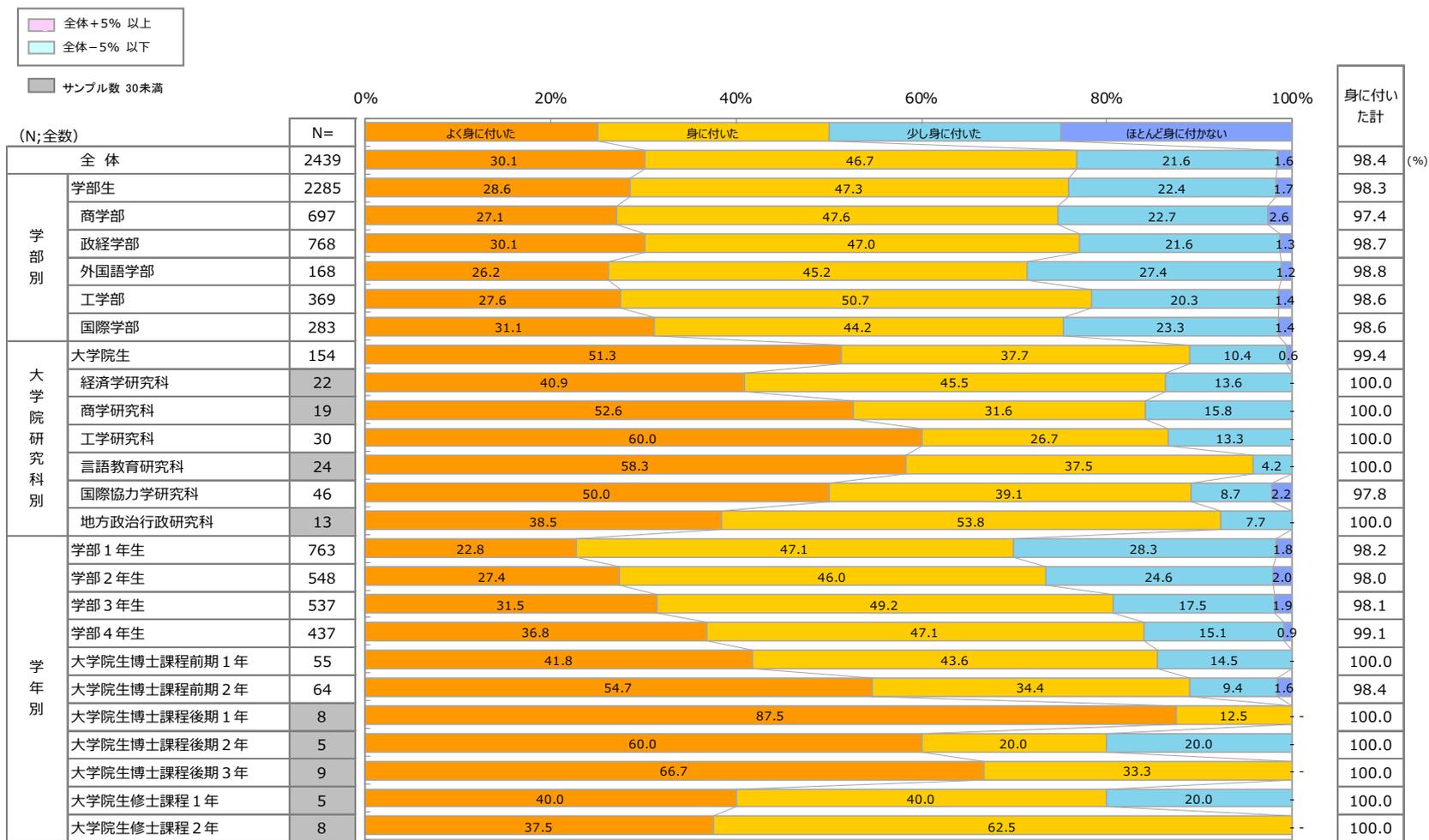
- ・専門分野に関する知識・技能の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の97.9%に達し、「よく身に付いた」は24.1%となった。
- ・学部別では、各学部で「身に付いた計」が95%以上。
「よく身に付いた」は工学部が26.8%で最も高く、外国語学部が26.2%と続く。
大学院生は「身に付いた計」が98.7%に達し、「よく身に付いた」が31.2%となった。
- ・学年別では、「よく身に付いた」は学部生の中では4年生が26.1%で最も高い。



情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力

Q24.情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力は身に付きましたか。(SA)

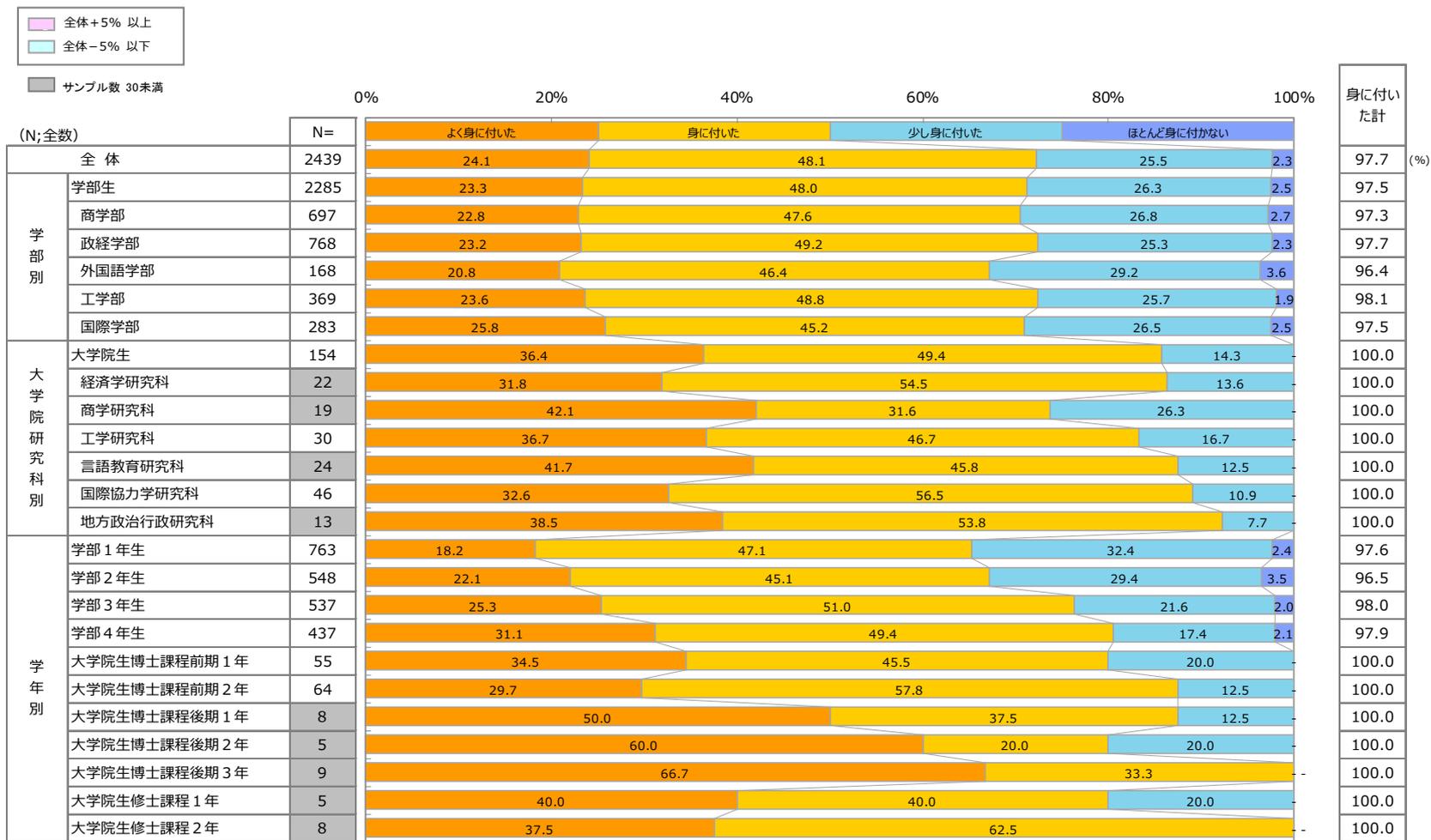
- ・情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の98.4%に達し、「よく身に付いた」は30.1%となった。
- ・学部別では、各学部で「身に付いた計」が95%以上で、「よく身に付いた」はいずれも25%以上。大学院生は「身に付いた計」が99.4%に達し、「よく身に付いた」が51.3%となった。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力

Q25.物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力は身に付きましたか。(SA)

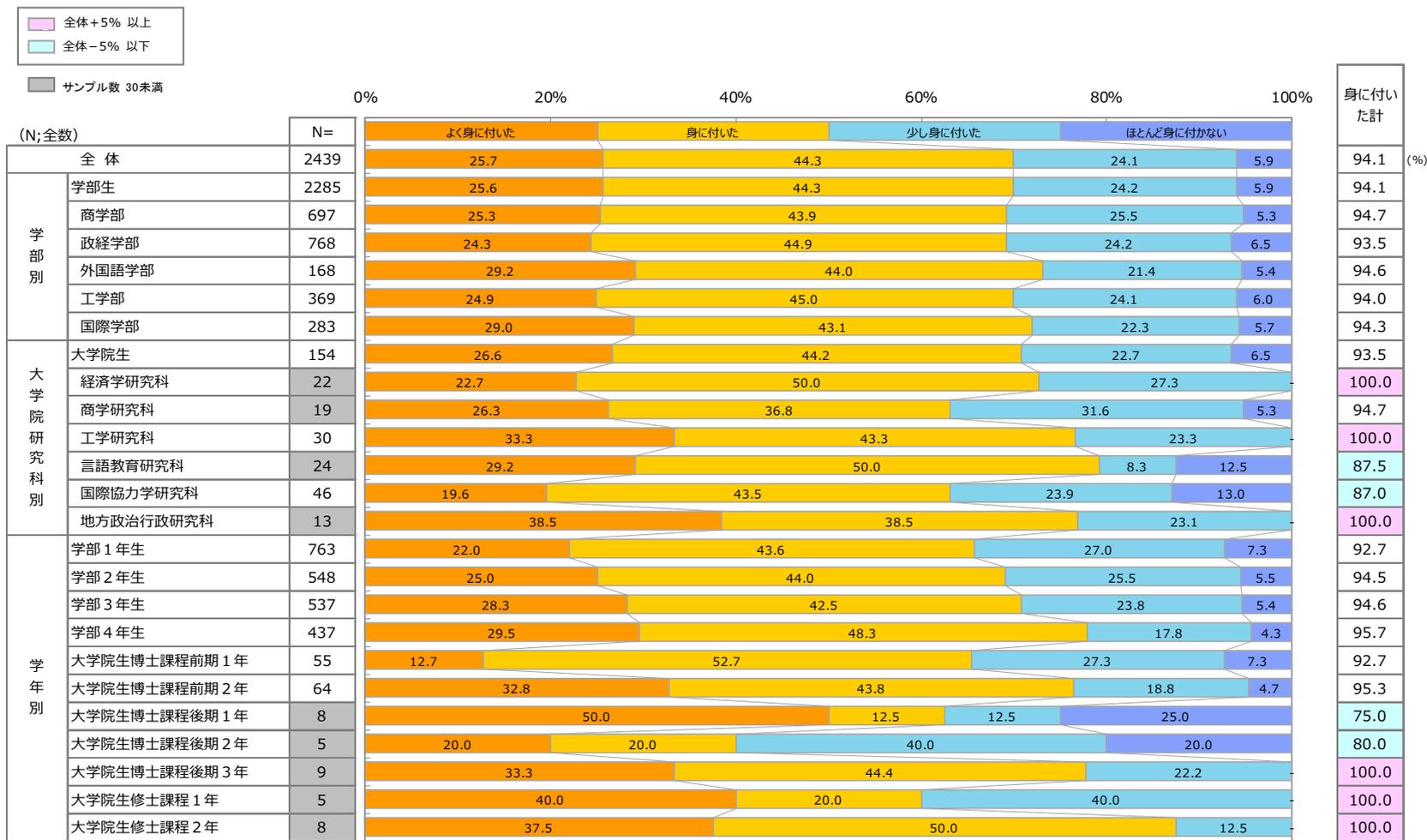
- 物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の97.7%に達し、「よく身に付いた」は24.1%となった。
- 学部別では、各学部で「身に付いた計」が95%以上で、「よく身に付いた」は国際学部が25.8%で最も高く、工学部が23.6%と続く。
- 大学院生は「身に付いた計」が100.0%に達し、「よく身に付いた」が36.4%となった。
- 学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



他の人と協力して物事を進めていく力

Q26.他の人と協力して物事を進めていく力は身に付きましたか。(SA)

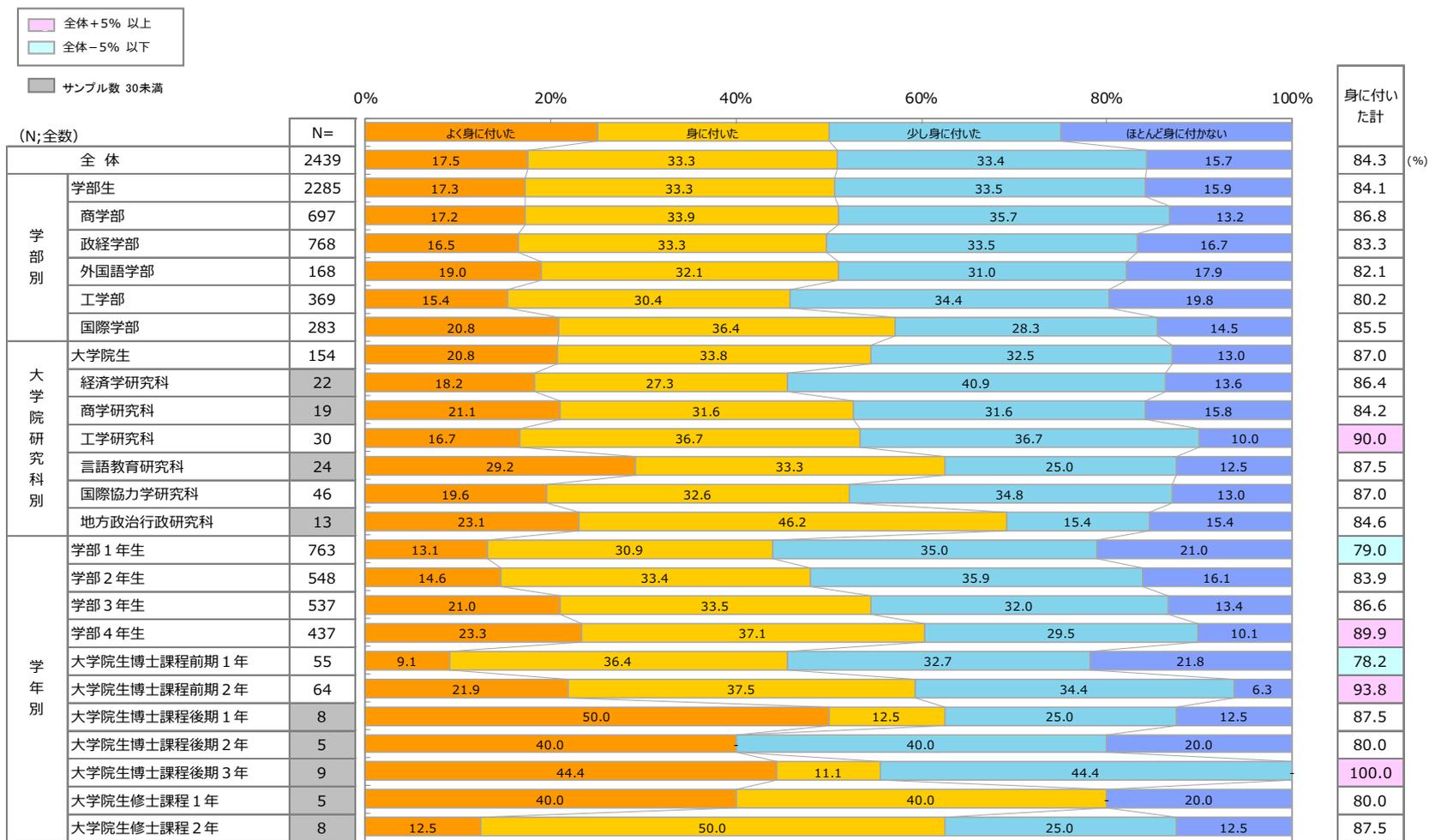
- ・他の人と協力して物事を進めていく力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の94.1%に達し、「よく身に付いた」は25.7%となった。
- ・学部別では、各学部で「身に付いた計」が90%以上で、「よく身に付いた」は外国語学部が29.2%で最も高く、国際学部が29.0%と続く。
大学院生は「身に付いた計」が93.5%に達し、「よく身に付いた」が26.6%となった。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



必要な場合のリーダーシップを発揮できる力

Q27.必要な場合のリーダーシップを発揮できる力は身に付きましたか。(SA)

- ・必要な場合のリーダーシップを発揮できる力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の84.3%に達し、「よく身に付いた」は17.5%となった。
- ・学部別では、「身に付いた計」は商学部（86.8%）が最も高く、国際学部（85.5%）と続く。「よく身に付いた」をみると、国際学部が20.8%と最も高い。
- ・大学院生は「身に付いた計」が87.0%で、「よく身に付いた」は20.8%。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



社会(国民・地域・国際等)が直面する課題を理解する力

Q28.社会(国民・地域・国際等)が直面する課題を理解する力は身に付きましたか。(SA)

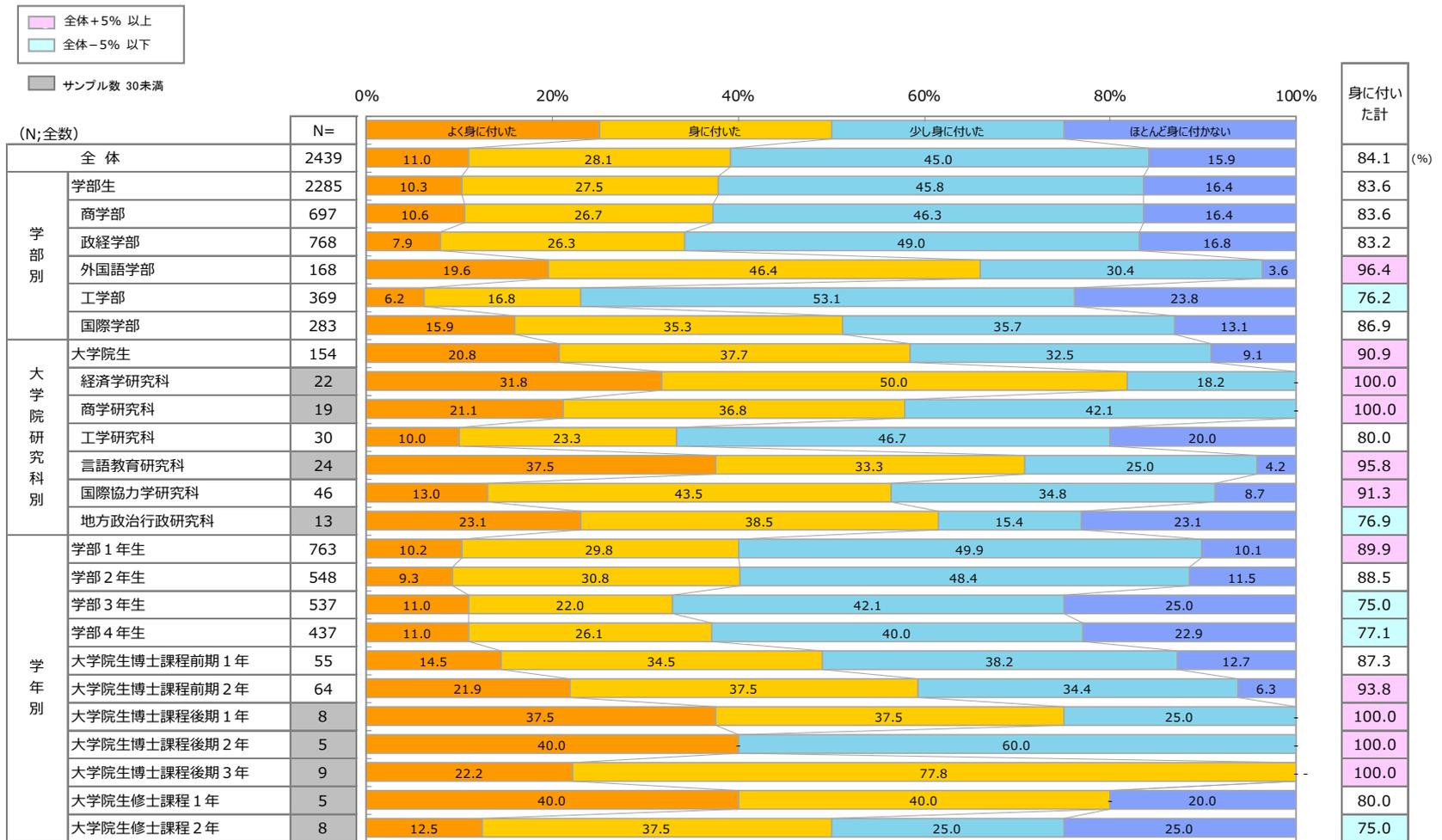
- ・社会(国民・地域・国際等)が直面する課題を理解する力の「身に付いた計(よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた)」は全体の93.3%に達し、「よく身に付いた」は17.9%となった。
- ・学部別では、政経学部で「身に付いた計」が96.1%と最も高く、国際学部が95.1%と続く。「よく身に付いた」をみると、国際学部が24.4%と最も高い。
- ・大学院生は「身に付いた計」が95.5%に達し、「よく身に付いた」が25.3%となった。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



外国語の運用能力

Q29.外国語の運用能力は身に付きましたか。(SA)

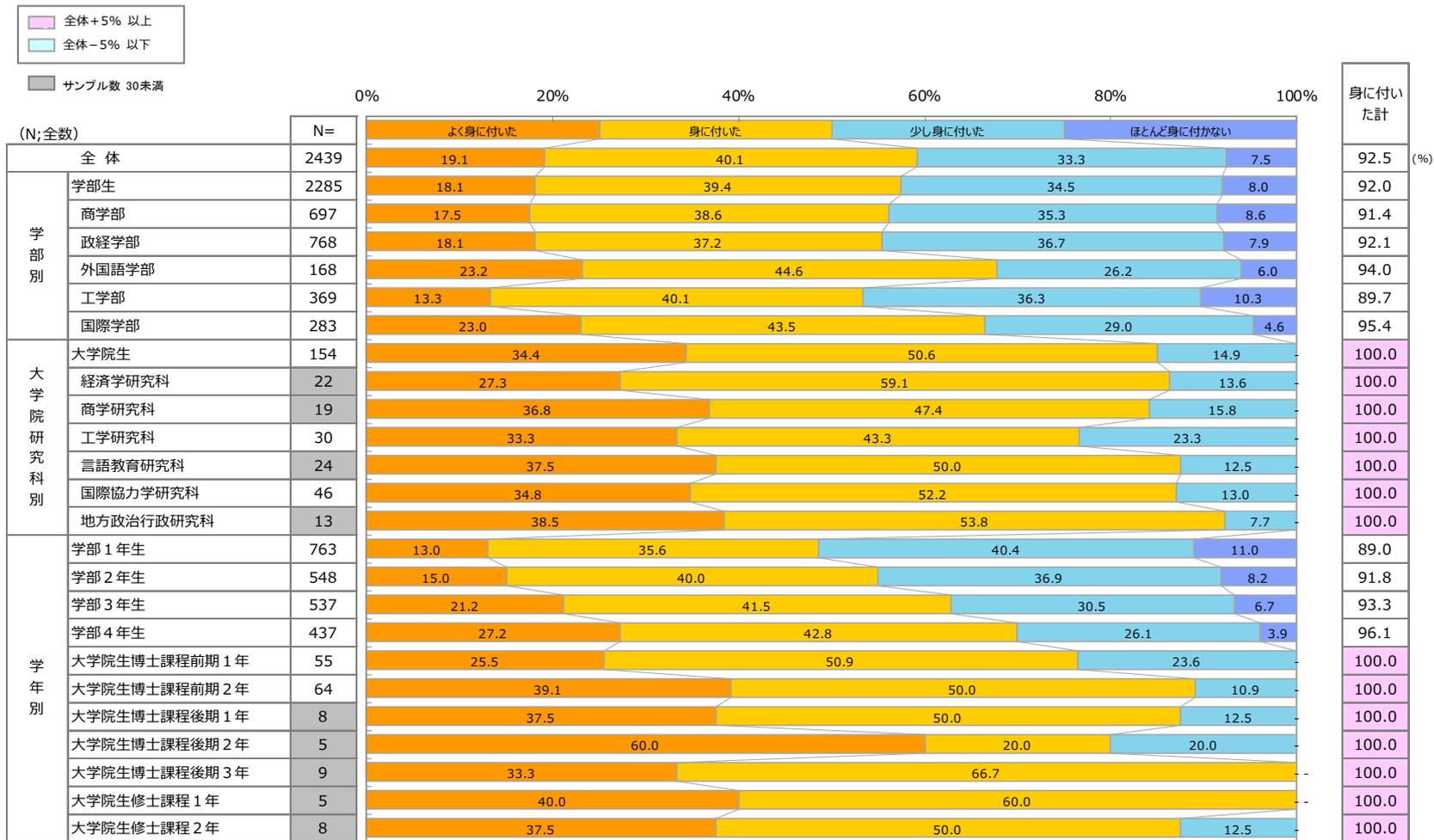
- ・外国語の運用能力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の84.1%となり、「よく身に付いた」は11.0%となった。
- ・学部別では、外国語学部で「身に付いた計」が96.4%に達し、国際学部が86.9%で続く。「よく身に付いた」をみても、外国語学部が19.6%と最も高く、国際学部が15.9%で続く。大学院生は「身に付いた計」が90.9%で、「よく身に付いた」が20.8%となった。
- ・学年別で学部生をみると、「よく身に付いた」は各学年10%程度。



学修した内容をまとめて、それを発表する力

Q30.学修した内容をまとめて、それを発表する力は身に付きましたか。(SA)

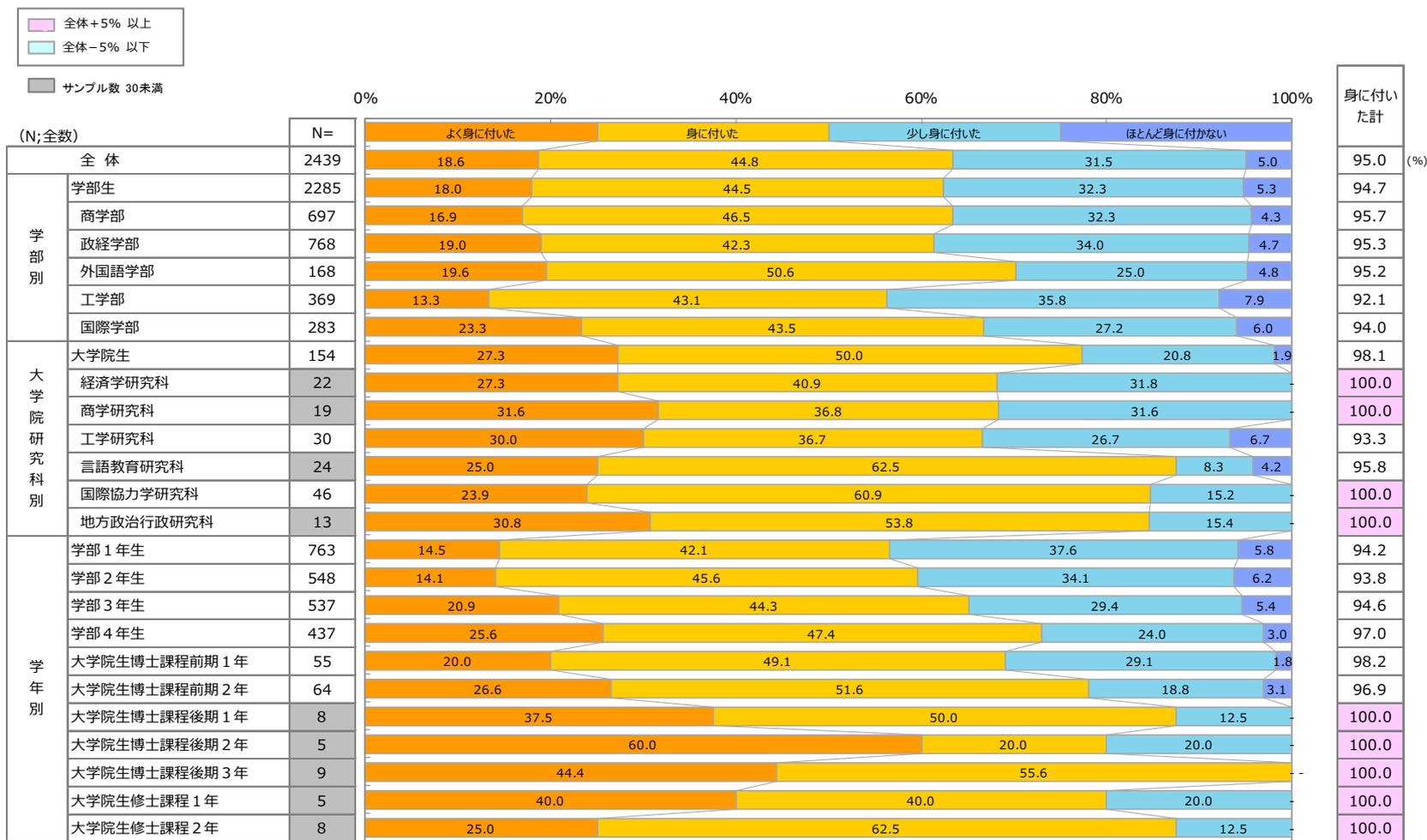
- ・学修した内容をまとめて、それを発表する力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の92.5%に達し、「よく身に付いた」は19.1%となった。
- ・学部別では、各学部で「身に付いた計」が概ね90%以上。「よく身に付いた」をみると、外国語学部が23.2%と最も高く、国際学部が23.0%で続く。大学院生は「身に付いた計」が100.0%に達し、「よく身に付いた」が34.4%となった。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



表現すべき内容を文章にして書ける力

Q31.表現すべき内容を文章にして書ける力は身に付きましたか。(SA)

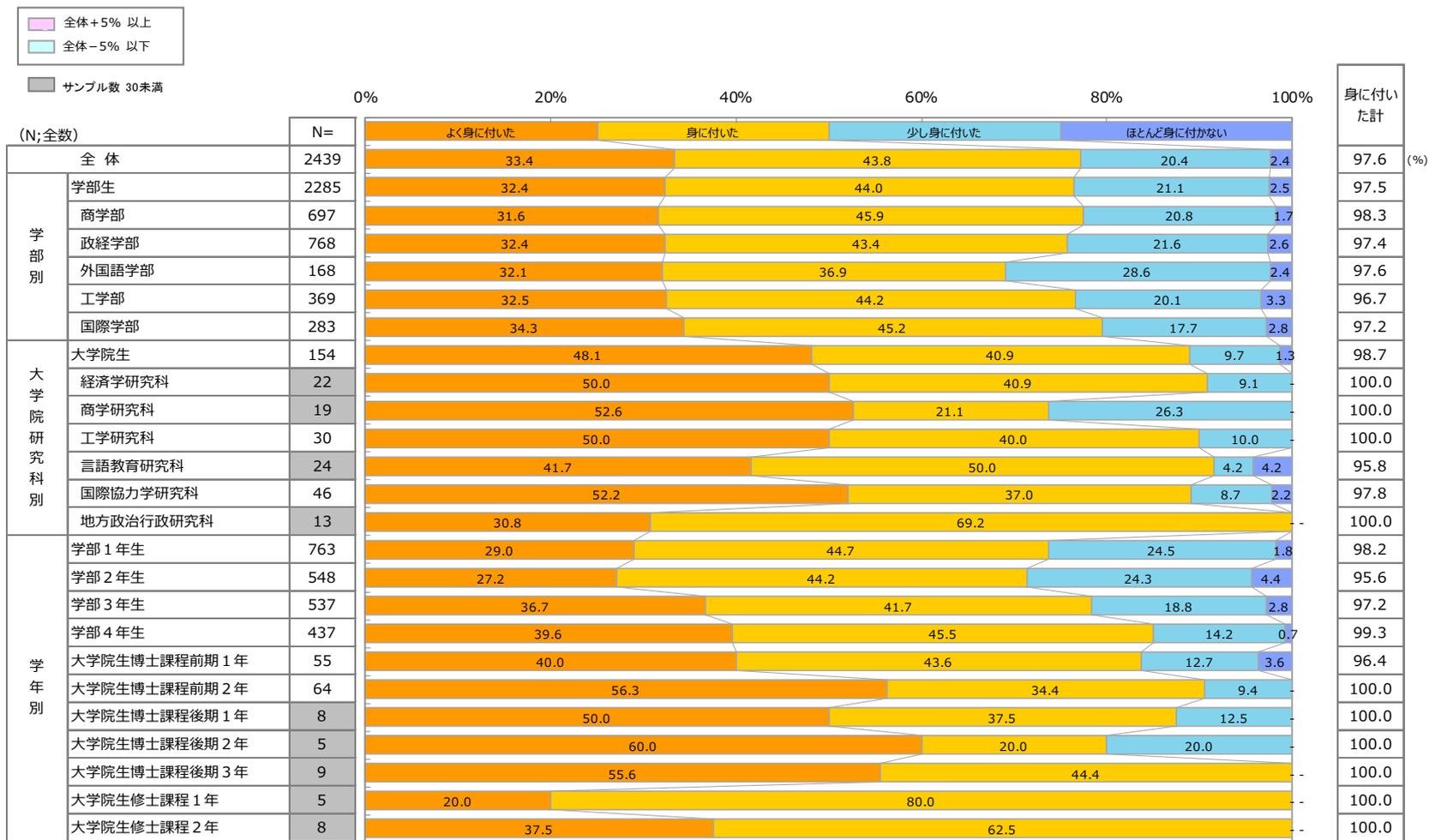
- ・表現すべき内容を文章にして書ける力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の95.0%に達し、「よく身に付いた」は18.6%となった。
- ・学部別では、「身に付いた計」は、全ての学部で90%以上。「よく身に付いた」をみると、国際学部が23.3%と最も高く、外国語学部が19.6%で続く。大学院生は「身に付いた計」が98.1%に達し、「よく身に付いた」が27.3%となった。
- ・学年別で学部生の「よく身に付いた」をみると、4年生は25.6%で最も高く、続くのは3年生の20.9%となった。



パソコンで文書や資料を作成する力

Q32.パソコンで文書や資料を作成する力は身に付きましたか。(SA)

- ・パソコンで文書や資料を作成する力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の97.6%に達し、「よく身に付いた」は33.4%となった。
- ・学部別では、どの学部でも「身に付いた計」が95%以上。「よく身に付いた」をみると、各学部で30%以上。大学院生は「身に付いた計」が98.7%に達し、「よく身に付いた」が48.1%となった。
- ・学年別で学部生の「よく身に付いた」をみると、4年生が39.6%で最も高く、続くのは3年生の36.7%となった。

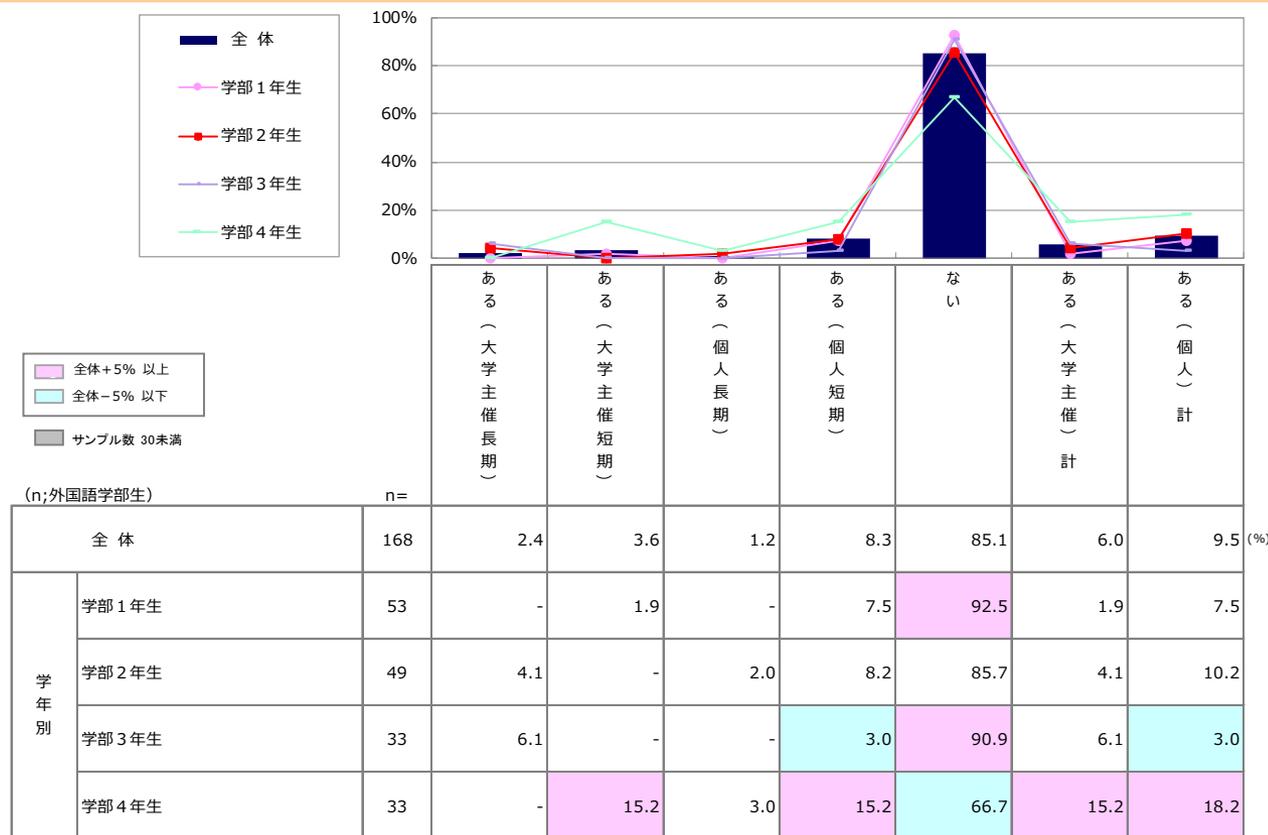


学部設問項目

海外での語学研修経験

Q33.海外で語学研修をしたことがありますか（入学以来本年度3月までの実施予定も含む）。（MA）
（外国語学部生のみ）

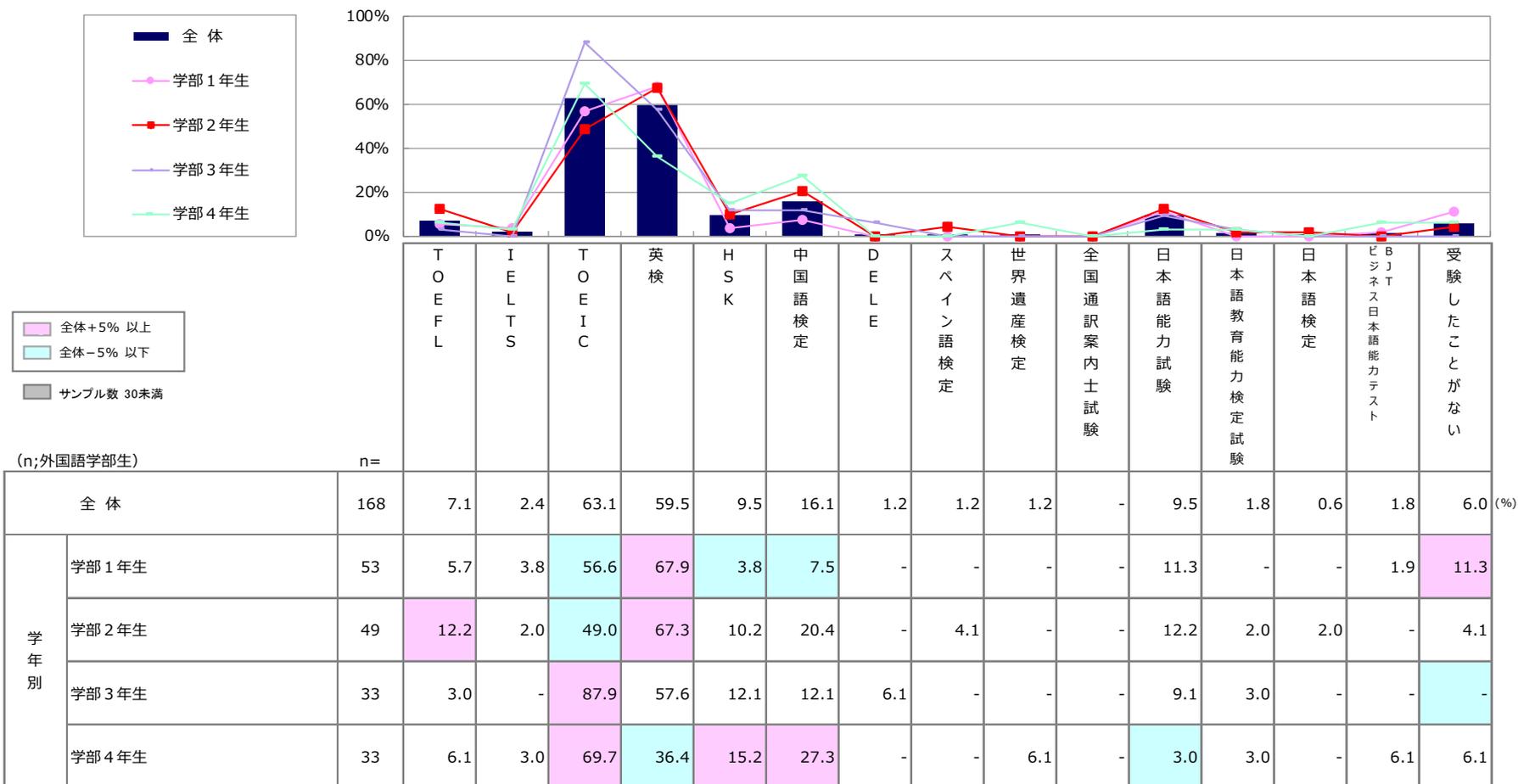
- ・外国語学部生の海外での語学研修経験は「ない」が85.1%。「ある（個人）」計は9.5%と、「ある（大学主催）」計（6.0%）を上回る。
- ・学年別では、1年生は「ある（個人短期）」（7.5%）が最も高く、「ある（大学主催短期）」（1.9%）が続く。長期の語学研修経験は「大学主催」「個人」ともに0%で、語学研修経験としては、短期のみ。2年生は「ある（個人短期）」（8.2%）が最も高く、「ある（大学主催長期）」（4.1%）が続く。個人の語学研修経験の方が大学主催の語学研修経験よりも高い。3年生は「ある（大学主催長期）」（6.1%）が最も高く、「ある（個人短期）」（3.0%）が続く。大学主催の語学研修経験の方が個人の語学研修経験よりも高い。4年生は「ある（大学主催短期）」「ある（個人短期）」がともに15.2%と、長期より短期の割合が高い。



語学検定試験受検有無

Q34.語学に関する検定試験を受検したことがありますか。
 (MA) (外国語学部生のみ)
 ※以下の検定試験を受検したことがない方は、何もチェックせずに、次に進んでください。

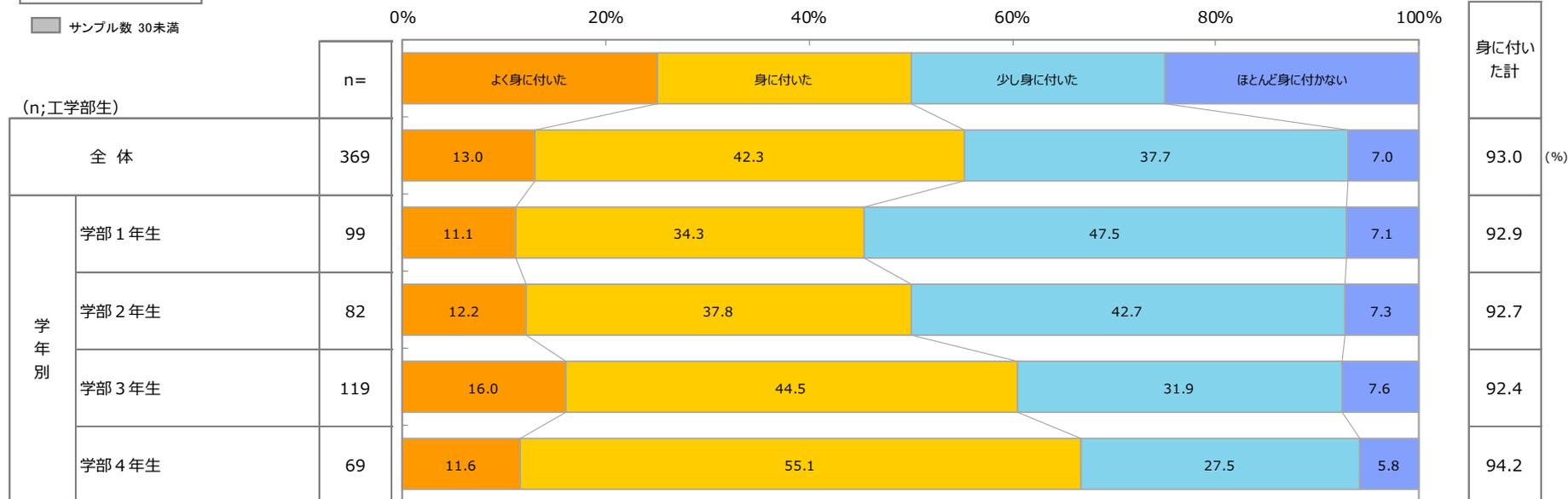
- ・受検経験がある語学検定試験は「TOEIC」が63.1%、「英検」が59.5%と英語の検定が上位にあがり、「中国語検定」が16.1%で続く。
- ・学年別でみると、「TOEIC」は3年生が87.9%と最も高く、2年生が49.0%と最も低い。「英検」は1年生が67.9%と最も高く、4年生が36.4%と最も低い。「中国語検定」は4年生が27.3%と最も高く、1年生が7.5%と最も低い。



リーダーシップ能力や課題に対する解決能力

Q35.実験・実習・演習によって、リーダーシップ能力や課題に対する解決能力が身に付きましたか。(SA)
(工学部生のみ)

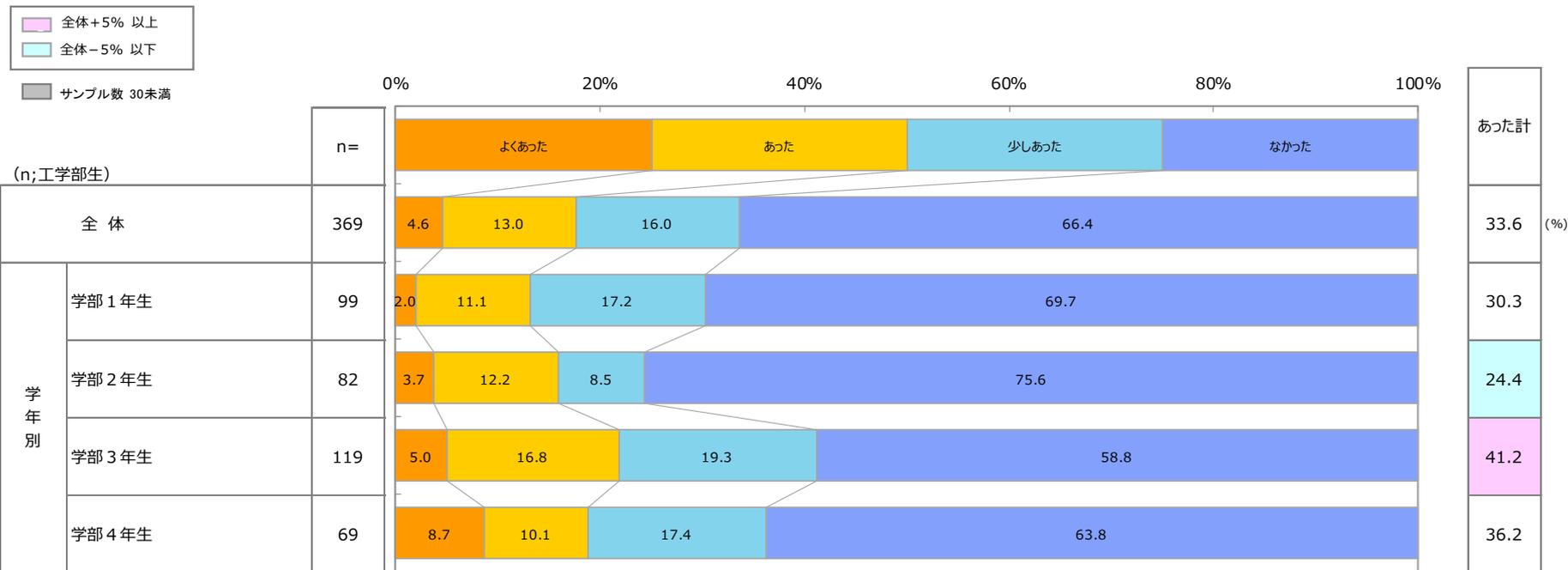
- 工学部生のリーダーシップ能力や課題に対する解決能力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の93.0%に達し、「よく身に付いた」は13.0%となった。
- 学年別では、全ての学年で「身に付いた計」が90%以上。「よく身に付いた」をみると、3年生が16.0%と最も高い。



コラボコースでの他学科の教員や学生と話す機会の有無

Q36. (コラボコースの学生への質問) コラボコースの授業を履修して、他学科の教員や学生と話す機会がありましたか。(SA) (工学部生のみ)

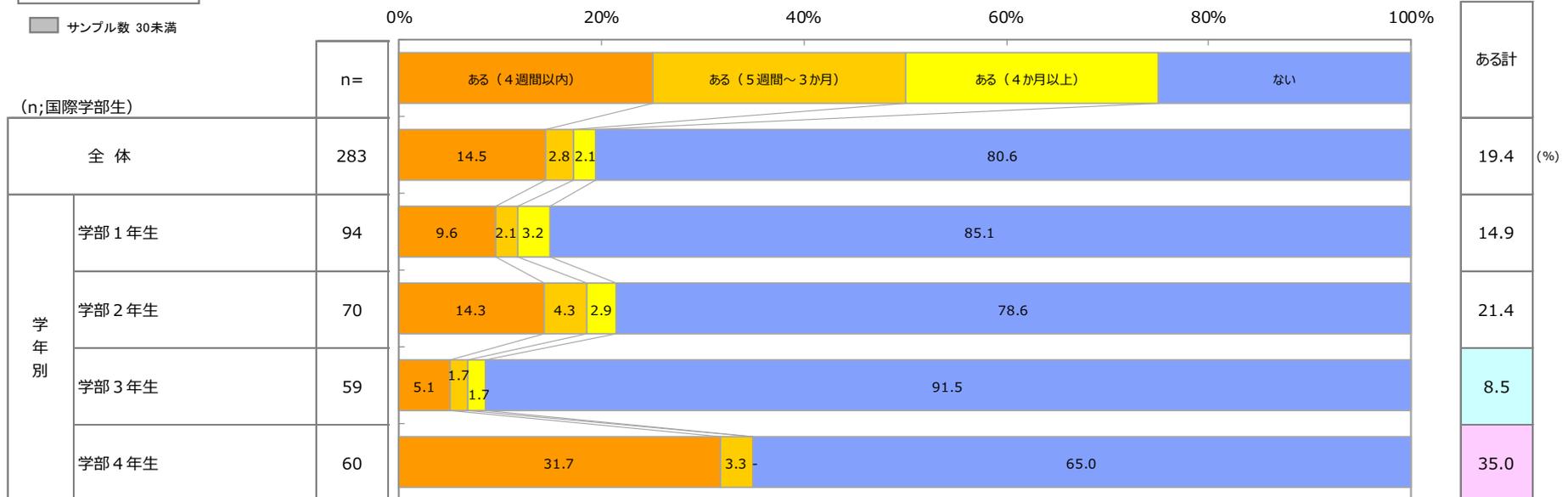
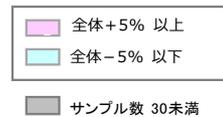
- ・コラボコースでの他学科の教員や学生と話す機会が「あった計（よくあった+あった+少しあった）」は全体の33.6%。
- ・学年別でみると、「あった計」は3年生が41.2%と最も高く、2年生が24.4%と最も低い。



海外研修経験

Q37.海外研修に参加したことがありますか、あるいは3月までに参加する予定がありますか。(海外短期研修・語学留学、海外ゼミ合宿、個人研修奨学金、長期留学、海外インターンシップ等) (SA)
(国際学部生のみ)

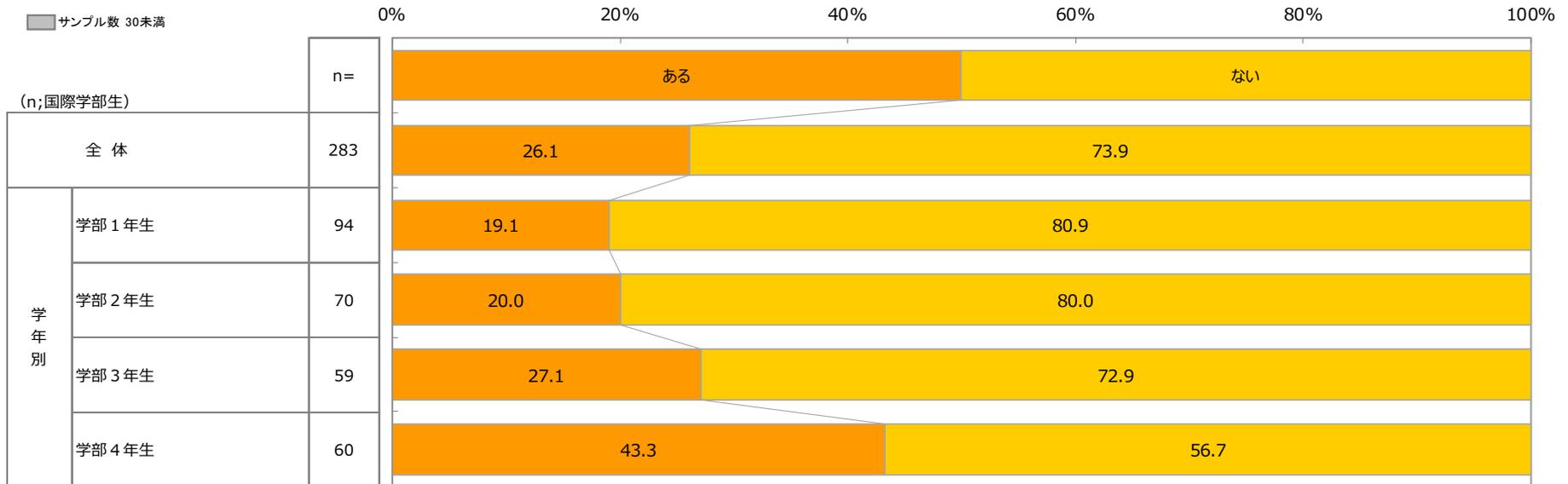
- ・国際学部生の海外研修経験が「ある計（ある（4週間以内）+ある（5週間～3か月）+ある（4か月以上））」は全体の19.4%、「ない」が80.6%。
- ・学年別では、「ない」を除いて全ての学年で「ある（4週間以内）」が最も多い。「ある（4週間以内）」では、4年生が31.7%と特に多い。



国内、国外におけるボランティア・NGO活動参加有無

Q38.入学以来、国内、国外におけるボランティア活動やNGO活動に参加したことがありますか。(SA)
(国際学部生のみ)

- ・国際学部生の国内、国外におけるボランティア・NGO活動参加経験は「ある」26.1%。
- ・学年別にみると、1年生から4年生と上がるにつれ参加経験率が上がり、4年生は43.3%（全体より+17.2pt）と特に高い。



学修行動調査結果 に対する所見

大学全体

1. 本年度の授業の中での経験について

令和元年度、令和2年度(以下「過去2年間」という。)の結果と比較すると、令和2年度で減少傾向となったものの全ての項目で、上昇傾向が見られる。特に、「自分の考えや課題を発表する授業」「学生同士が議論する授業」「演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業」の上昇率は顕著である。

設問項目	令和元年度	令和2年度	令和4年度
自分の考えや課題を発表する授業	80.4	76.5	83.3
教員への質問・意見を述べたことの実験	66.3	63.2	67.9
学生同士が議論する授業	68.7	59.8	73.1
演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業	55.2	39.1	58.5
定期的な小テスト・レポートのある授業	94.2	97.6	95.6
Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業	86.7	98.1	98.1

※「あった計(よくあった+ときどきあった)」の比率(単位:%)

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

過去2年間の結果と比較すると、令和2年度で減少傾向となったものの全ての項目で、コロナ禍前の令和元年度における数値に戻す傾向となっている。

設問項目	令和元年度	令和2年度	令和4年度
他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験	78.3	52.0	77.5
教職員への学修に関する相談経験	40.5	31.9	43.5
授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験	61.6	32.5	56.9
授業や課題のためインターネットでの情報収集経験	92.6	95.1	95.4

※「あった計(よくあった+ときどきあった)」の比率(単位:%)

3. 本年度の過当たりの学修等時間について

過去2年間の結果と比較すると、学修等時間における大きな変化はみられない。

設問項目	令和元年度	令和2年度	令和4年度
授業出席科目数	13科目以上(40.8%)	13科目以上(46.4%)	13科目以上(29.6%)
授業時間以外での授業関連学修・経験時間	1~3時間(42.7%)	1~3時間(39.3%)	1~3時間(41.1%)
授業と関連しない読書時間	1~3時間(34.0%)	1~3時間(38.1%)	1~3時間(38.3%)
部活動・サークル活動参加時間	19時間以上(18.0%)	1~3時間(8.7%)	1~3時間(13.6%)
アルバイト・就労時間	19時間以上(42.3%)	19時間以上(30.2%)	19時間以上(38.3%)
個人的な趣味活動時間	19時間以上(34.8%)	19時間以上(29.5%)	19時間以上(33.8%)

※各設問項目において最も選択された選択肢の比率

大学全体

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

過去2年間の結果と比較すると、令和2年度で減少傾向となったものの全ての項目で、上昇傾向となった。特に令和元年度との比較では、「社会が直面する課題の理解」「外国語運用能力」の上昇は顕著である。

設問項目	令和元年度	令和2年度	令和4年度
一般的な教養	96.6	95.4	97.5
専門分野に関する知識・技能	96.3	95.8	97.9
情報収集力	96.9	96.8	98.4
課題発見・解決能力	95.9	95.6	97.7
協働力	93.3	79.2	94.1
リーダーシップ	83.4	69.3	84.3
社会が直面する課題の理解	90.6	90.8	93.3
外国語運用能力	79.1	81.8	84.1
発表能力	91.8	84.7	92.5
文章表現能力	93.6	93.8	95.0
パソコンで資料を作成する力	96.3	97.7	97.6

※「身に付いた計(よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた)」の比率(単位:%)

(2)長所と課題

コロナ禍となった令和2年度におけるメディア授業を中心とした学修成果の達成状況は、全体的に減少傾向となったものの、メディア授業と対面授業を併用した令和4年度では、全ての項目で、コロナ禍前の令和元年度を上回る結果となった。コロナ禍において「Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行う授業」が大幅に増え、これに対面授業を組合せたことにより、柔軟かつ効果的な教育学修となったと考えられる。なお、「外国語運用能力」の学修成果は、コロナ禍とは関係なく上昇しており「メディア授業」を中心とした教育が適しているのかもしれない。

(3)教育課程や教育内容・方法などの改善方策

今回の結果では、大きな課題はみられない。授業内容によっては、対面授業よりメディア授業の方が効果が上がる場合もある。引き続き、「Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行う授業」を推奨するとともに、外国語科目などでは、一つの授業でメディア授業と対面授業を併用したハイブリッド型授業を試行的に導入するなど、学修成果を踏まえた授業形態を研究する必要がある。

商学部

1. 本年度の授業の中での経験について

令和元年度、令和2年度（以下、「過去2年間」と表記）の結果と比較すると、一部の項目で前回よりも低下がみられるもののその差は僅差である。「学生同士が議論する授業」「演習、実験、実習、フィールドワークなどの体験授業」では20ポイント以上の上昇となっている。

設問項目	令和元年度	令和2年度	令和4年度
自分の考えや課題を発表する授業	77.3	72	80.1
教員への質問・意見を述べたことの経験	59.8	57	59.3
学生同士が議論する授業	66	54.1	74.3
演習、実験、実習、フィールドワークなどの体験授業	42.1	33	53.4
定期的な小テスト・レポートのある授業	94	97	96.4
Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業	87.1	98.6	98.1

※「あった計（よくあった+ときどきあった）」の比率（単位：％）

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

令和2年度に「授業や課題のためインターネットでの情報収集経験」を除き減少傾向となったが、令和4年度ではコロナ禍前の令和元年度と同等の数値に回復している。

設問項目	令和元年度	令和2年度	令和4年度
他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強	76.9	47.7	79.6
教職員への学修に関する相談経験	34.6	26.1	37.3
授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験	59	31.1	51.4
授業や課題のためインターネットでの情報収集経験	90.7	95.5	94.7

※「あった計（よくあった+ときどきあった）」の比率（単位：％）

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

過去2年間の結果と比較して学修等時間における大きな変化はみられない。ただし、「授業出席科目数」において最も多く選択された「13科目以上」の割合が過去2年間と比べ大幅に低下している。

設問項目	令和元年度	令和2年度	令和4年度
授業出席科目数	13科目以上 (43.1)	13科目以上 (48.3)	13科目以上 (26.3)
授業時間以外での授業関連学修・経験時間	1～3時間 (48.5)	1～3時間 (42.4)	1～3時間 (46.3)
授業と関連しない読書時間	1～3時間 (34.4)	1～3時間 (36.2)	1～3時間 (37.0)
部活動・サークル活動参加時間	19時間以上 (16.5)	1～3時間 (9.7)	1～3時間 (15.1)
アルバイト・就労時間	19時間以上 (47.1)	19時間以上 (34.2)	19時間以上 (39.6)
個人的な趣味活動時間	19時間以上 (35.6)	19時間以上 (31.2)	19時間以上 (32.1)

※各設問項目において最も選択された選択肢の比率（単位：％）

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力（学修成果）について

(1) 学修成果の達成状況

コロナ禍の令和2年度に「協働力」「リーダーシップ」が大きく落ち込んだが、令和4年度にはそれらの項目も回復している。「パソコンで資料を作成する力」はコロナ禍でも上昇したが、令和4年度はさらに上昇している。

設 問 項 目	令和元年度	令和2年度	令和4年度
一般的な教養	98	94.5	97.7
専門分野に関する知識・技能	96.2	95	97.4
情報収集力	97.2	95.8	97.4
課題発見・解決能力	97.2	94.7	97.3
協働力	94.2	76.4	94.7
リーダーシップ	85.5	67.9	86.8
社会が直面する課題の理解	89.9	90.5	94.1
外国語運用能力	79.3	81.1	83.6
発表能力	91.5	80	91.4
文章表現能力	95.4	94.5	95.7
パソコンで資料を作成する力	96.8	97.4	98.3

※「身についた計（よく見についた＋身についた＋少し身についた）の比率（単位：％）」

(2) 長所と課題

コロナ禍の令和2年度には、他者とかかわる中で育まれる「協働力」や「リーダーシップ」といった項目が大幅に落ち込んだが、令和4年度にはコロナ禍前の水準に回復した。「外国語運用能力」はコロナ禍にあっても影響を受けず、令和4年度まで一貫して上昇している。また、「社会が直面する課題の理解」は過去2年間と比べ大幅に上昇している。これは授業においてSDGsの理解を深め、SDGsの課題に向き合う取り組みが行われていることが影響しているのかもしれない。

(3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

今回の結果からは、大きな課題はみられない。「協働力」や「リーダーシップ」の育成は対面授業だからこそ効果が得られることが再確認された。対面授業の強み、ICTを活用した教材・課題の活用などコロナ禍を経て得られた知見を今後の授業運営に生かしていくことが求められる。

政経学部

1. 本年度の授業の中での経験について

「自分の考えや課題を発表する授業有無」について、「あった計（よくあった＋ときどきあった）」が、令和元年度学修行動調査結果（以下、令和元年度）では74.4%、令和2年度学修行動調査結果（以下、令和2年度）では71.8%、令和4年度学修行動調査結果（以下、令和4年度）では79.6%であった。それらの数値は、令和元年度および令和2年度では、全学部の中で最低値となっているが、令和4年度では、最低値とはなっていないものの、全体に比べて4%ほど低い。

「教員への質問・意見を述べたことの経験有無」について、「あった計（よくあった＋ときどきあった）」は、令和元年度61.6%、令和2年度61.5%と、推移はあまり変化が見られないが、令和4年度では62.4%と、過去2年よりも上昇している。

「学生同士が議論する授業有無」について、「あった計（よくあった＋ときどきあった）」は、令和元年度、令和2年度、令和4年度それぞれの年度で、全体に比べて5%以上、下回っている。また、「演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業有無」について、「あった計（よくあった＋ときどきあった）」は、令和元年度、令和2年度、令和4年度それぞれの年度で、全体の割合を10%以上、下回っている。

「定期的な小テスト・レポートのある授業有無」、「Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業有無」について、「あった計（よくあった＋ときどきあった）」が、令和元年度、令和2年度、令和4年度それぞれの年度で、全体の割合を上回っている。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

「他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験有無」について、「あった計（よくあった＋ときどきあった）」は、令和元年度71.6%、令和2年度44.6%、令和4年度74.5%と、コロナ禍の令和2年度では50%以下と大きく低下しているのに対し、令和4年度はコロナ前の令和元年よりも上昇している。

「教職員への学修に関する相談経験有無」について、「あった計（よくあった＋ときどきあった）」は、令和元年度36.7%、令和2年度29.9%、令和4年度39.5%と、いずれの年度も全体の割合を下回っているが、令和4年は過去2年よりも上昇している。

「授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験の有無」について、「あった計（よくあった＋ときどきあった）」は、令和元年度、令和2年度、令和4年度それぞれの年度で、全体の割合を5%以上、上回っている。

「授業や課題のためインターネットでの情報収集経験有無」について、「あった計（よくあった＋ときどきあった）」は、令和元年度、令和2年度、令和4年度それぞれの年度で90%以上を上回っており、全体の割合と比べても、大きな差は見られない。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

「週当たりの授業出席科目数」について、令和元年度、令和2年度、令和4年度それぞれの年度において、「13科目以上」の割合が最も高いが、令和4年度は過去2年と比べて、「7～8科目」の割合が10%以上上昇、「11～12科目」の割合が5%以上低下している。

「週当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験時間」、「週当たりの授業と関連しない読書時間」、「週当たりの部活動・サークル活動参加時間」について、令和元年度、令和2年度、令和4年度それぞれの年度において、「全くない」を除いて、「1～3時間」の割合が最も高い。

「週当たりのアルバイト・就労時間」、「週当たりの個人的な趣味活動時間」は、令和元年度、令和2年度、令和4年度それぞれの年度において、「19時間以上」の割合

が最も高い。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力（学修成果）について

（1）学修成果の達成状況

令和4年度は、「パソコンで文書や資料を作成する力」のみ令和2年度より0.9%減少となったものの、その他の全ての項目では、過去2年と比べて上昇している。特に令和元年度との比較では、「物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力」および「学修した内容をまとめて、それを発表する力」の2項目では2.5%以上の上昇、そして、「外国語運用能力」は、4.8%の上昇となり、他の項目よりも大きな上昇幅となっている。

（2）長所と課題

「教員への質問・意見を述べたことの経験」、「教職員への学修に関する相談経験」について、令和4年は過去2年よりも上昇していることは、積極的な授業への参加意欲を反映していると考えられる。また、令和4年度は「外国語運用能力」の学修成果が、令和元年度よりも大きく上昇しているため、令和4年度のメディア・対面の両授業形態の機能が効果的に働いていると考えられる。

しかしながら、「学生同士が議論する授業」「演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業」については、令和元年度、令和2年度、令和4年度それぞれの年度で、全体の割合を下回っているため、現在の授業形態の構成を見直すことが課題である。

（3）教育課程や教育内容・方法などの改善方策

令和元年度、令和2年度、令和4年度それぞれの年度で、授業や課題のため図書館で資料・文献を調べたり、インターネットで情報収集したりする割合が、全体の割合を上回った。それらを踏まえると、今後も引き続き、授業やゼミナールでの質問や課題に対して、リサーチ力を強化していくことは、学生・教員間のコミュニケーションが活発化され、さらなる学修成果の向上につながるだろう。そして、上述した課題を解決するためには、各授業に見合った、実践的な授業の導入が必要であると考えられる。

外国語学部

1. 本年度の授業の中での経験について

「自分の考えや課題を発表する授業」および「教員への質問や意見の経験」は、コロナ前の令和元年度を上回った（91.6%→95.2%、73.4%→79.8%）。「学生同士が議論する授業」とともに全体平均を大きく上回っている。学生が主体的に参加する授業が外国語学部の特徴として読み取れる。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

「他の学生との話し合いや勉強」はオンライン授業などの影響で、前はわずか63.0%だったが、今回は81.5%に回復し、学部内で最も高い数値となっている。一方、「図書館での資料・文献調査」は、前回調査より大幅に増加はしたものの（21.9%→47.6%）、依然学部平均を下回っている。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

「授業出席科目数」は前回調査よりも減少しているが、「授業時間以外での授業関連学習時間」は高い数値を維持しており、「19時間以上」が10.7%に上っている。外国語学部では、依然として授業ごとの課題等が多く課されていることが読み取れる。

「アルバイトの時間」に関しては、「19時間以上」の割合が前回調査より大きくなっている（33.8%→45.8%）。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力（学修成果）について

（1）学修成果の達成状況

「専門分野についての知識・技能」（98.2%）、「外国語運用力」（96.4%）、「情報収集力」（98.8%）、「他者と協力して物事を進めていく力」（94.6%）、「学修内容をまとめて発表する力」（94.0%）、「文章で書く力」（95.2%）は、前回・前々回の調査に引き続き、いずれも学部平均を上回っている。一方、「社会が直面する課題を理解する力」（88.7%）は、平均（93.3%）を大きく下回っている。

（2）長所と課題

「外国語運用能力」（96.4%）や「専門知識・技能」（98.2%）の修得を学生が実感できている点は、外国語学部の大きな長所であると言える。今後の課題は、専門的知識以外の分野、とりわけ社会が直面する課題への学生の関心を高め、理解を深めることであると考えられる。

（3）教育課程や教育内容・方法などの改善方策

外国語学部のディプロマ・ポリシーでは、「専門的知識」「言語運用能力」「協働で諸問題を解決する力」「自律的に学ぶ力」の修得等を掲げている。今回の調査結果を見ると、これらの力は概ね身に付けられているということが言えると思われるが、「協働で諸問題を解決する力」に関しては課題も残る。授業で扱うトピックに社会的課題や世界情勢に関わるものを積極的に取り入れ、理解を深めるような活動を設計するなど、具体的な取り組みを行っていく必要がある。

5. 学部・研究科設問項目について

海外での語学研修経験は、「ない」が圧倒的に多く、「ある」割合はわずか15.5%（大学主催6%、個人9.5%）で、前回調査よりも10pt以上減少している。これは、コロナの影響で、大学主催の長期の研修が行われなかった影響が大きいと思われる。

語学検定試験に関しては、1、2年生に英検、3、4年生にTOEICの受験経験がある割合が大きかったが、1年生には、検定試験の受験経験がない学生も一定数見られた。語学研修や検定試験は、学習のモチベーションを高めるのにも役立つため、積極的に挑戦するよう働きかけていく必要がある。

工学部

1. 本年度の授業の中での経験について

「演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業」の数値が高く（学部全体57.6%：工学部91.1%）、学部の特徴が表れている。「教員への質問・意見を述べたことの経験」も高い数値を示している（学部全体66.0%：工学部73.2%）。一方、「自分の考えや課題を発表する授業」（学部生82.3%：工学部77.8%）、「学生同士が議論する授業」（学部生72.1%：工学部67.2%）は全体よりも低い数値であるが、前回からはそれぞれ5.2%増、7.4%増であり、コロナ禍からの回復の様子が窺える。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

「授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験」は全体と比較して低い（学部生54.8%：工学部41.7%）。「他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験」（学部全体77.4%：工学部75.1%）は前回から16.5%増、教職員への学修に関する相談経験有無（学部全体41.0%：工学部45.5%）は9.6%増となっている。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

「授業時間以外での授業関連学修・経験時間」は、3時間以下である学生が44.1%と学部最少であるものの、前回からは5.4%増えている。一方、19時間以上取り組んでいる学生は前回同様に学部で最多で13.3%（前回13.5%）である。「読書時間」は、ゼロの学生が前回から3.6%減で29.0%である。「部活・サークル活動」、「アルバイト・就労時間」はゼロがそれぞれ29.8%、72.6%であり、他学部と比較して活動が少ない。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力（学修成果）について

（1）学修成果の達成状況

「一般的な教養」「専門知識・技能」「情報収集力能力」「課題発見・解決能力」の身に付いた計は、それぞれ97.8%、98.9%、98.6%、98.1%と、いずれも高い値を示している。「他の人と協力」についても前回から13.6%増の94.0%と高い値となっている。「リーダーシップ能力」（学部全体84.1%：工学部80.2%）、「外国語運用能力」（学部全体83.6%：工学部76.2%）、「社会の課題を理解する能力」（学部全体93.2%：工学部85.9%）は全学部の中で最も低い値となっている。

（2）長所と課題

大きな長所は、「専門知識・技能」の「身に付いた計」が98.9%で、特にその中で「よく身に付いた」という回答が26.8%と高い数値になった点である。課題は、学部最下位の「外国語運用能力」である。ただし、前回10.1%増、今回3.8%増と改善の傾向は見られる。

（3）教育課程や教育内容・方法などの改善方策

ディプロマ・ポリシーにおける「専門的な知識と技術」「課題解決能力」に関する項目や、「他者との協働」については身についたと感じている学生が多い一方、「リーダーシップ能力」「外国語運用能力」「社会的課題を理解する力」は不足していると感じている学生が多い。工学部では体験的な授業が多く、教員とのコミュニケーションも取れているため、プロジェクト型授業や成果発表機会の拡大、課題設定やフィードバックの工夫など学生が達成感を感じられるような方法の導入が有効と考える。

5. 学部・研究科設問項目について

工学部設問項目の「リーダーシップ能力や課題解決能力」では、1年生から4年生まで年次が進むにつれ「よく身に付いた」「身に付いた」の合計が45.4%、50.0%、60.5%、66.7%と増加しており、特に「よく身に付いた」は3年生が16.0%と最も高く、実験・実習、演習が進むにつれて高い達成感が得られていることが分かる。また、コラボコース学生が「他学科教員や学生と話す機会」は、あった計が3年生で41.2%と最も高くなっており、2年生でのコラボコース所属以降で交流が進む様子が窺える。

国際学部

1. 本年度の授業の中での経験について

各表の↗は前回より上昇を、↘は下降を、→は変動1%以下の横ばいを示し、また大学全体の数字と比較して5%以上の差がある場合は朱書した（以下同じ）。

「自分の考えや課題を発表する授業」「教員への質問・意見を述べたことの経験」「学生同士が議論する授業」は、前回より増加し、かつ大学全体より10%前後多い数字を示している。

設問項目	令和元年度	令和2年度	令和4年度	大学全体
自分の考えや課題を発表する授業	87.3	↗ 88.7	↗ 93.3	83.3
教員への質問・意見を述べたことの経験	66.9	↘ 63.9	↗ 74.0	67.9
学生同士が議論する授業	77.5	↗ 79.1	↗ 84.8	73.1
演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業	51.1	↘ 35.8	↗ 60.1	58.5
定期的な小テスト・レポートのある授業	91.2	↗ 97.0	↘ 94.7	95.6
Blackboard、E-mail等を活用し、教材・課題の受け取りや提出を行った授業	82.4	↗ 98.5	→ 97.9	98.1

* 「あった計（よくあった+ときどきあった）」の比率（単位：%）

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

前回と比べ各項目とも概ね大幅に増加し、コロナ前の数字に戻っており、2項目についてはコロナ前を上回る数字を示している。

設問項目	令和元年度	令和2年度	令和4年度	大学全体
他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験	78.5	↘ 58.8	↗ 80.6	77.5
教職員への学修に関する相談経験	38.4	↘ 32.5	↗ 45.9	43.5
授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験	65.5	↘ 33.4	↗ 60.8	56.9
授業や課題のためインターネットでの情報収集経験	95.8	↘ 92.5	↗ 95.8	95.4

* 「あった計（よくあった+ときどきあった）」の比率（単位：%）

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

授業出席科目数「13科目以上」が全学で最も高く、また「読書時間（1時間以上の合計）」「部活動・サークル活動参加時間（1時間以上の合計）」も全学で最も高い数字となっている。

設問項目	令和元年度	令和2年度	令和4年度	大学全体
授業出席科目数	13科目以上(47.5)	13科目以上(51.9)	13科目以上(35.0)	13科目以上(29.6)
授業時間以外での授業関連学修・経験時間	1～3時間(44.7)	1～3時間(46.6)	1～3時間(44.5)	1～3時間(41.1)
授業と関連しない読書時間>1	73.6	↘ 71.6	↗ 77.0	72.9
部活動・サークル活動参加時間>1	56	↘ 31.0	↗ 45.6	37.2
アルバイト・就労時間>1	82	↘ 70.1	↗ 80.9	79.5
個人的な趣味活動時間	19時間以上(33.8)	1～3時間(25.4)	19時間以上(27.6)	19時間以上(33.8)

* 各設問項目において最も選択された選択肢の比率（単位：%）、「>1」は1時間以上の合計を示す。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力（学修成果）について

(1) 学修成果の達成状況

全項目が前回より上昇し、特に「リーダーシップ」「社会が直面する課題の理解」「外国語運用能力」「発表能力」は大学全体と比較しても高い数字を示している。

設 問 項 目	令和元年度	令和2年度	令和4年度	大学全体
一般的な教養	70.5	↘ 63.3	↗ 78.5	77
専門分野に関する知識・技能	62	↘ 51.6	↗ 70.7	72.6
情報収集力	69.7	↘ 61.8	↗ 75.3	76.8
課題発見・解決能力	64.1	↘ 56.4	↗ 71.0	72.2
協働力	72.9	↘ 54.9	↗ 72.1	70
リーダーシップ	50.7	↘ 41.5	↗ 57.2	50.8
社会が直面する課題の理解	64.7	↘ 62.4	↗ 69.6	60.1
外国語運用能力	57	↘ 42.6	↗ 51.2	39.1
発表能力	61.3	↘ 53.4	↗ 66.5	59.2
文章表現能力	57.4	↘ 54.9	↗ 66.8	63.4
パソコンで資料を作成する力	73.3	↗ 76.7	↗ 79.5	77.2

* 「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた）」の比率（単位：％）（「少し身に付いた」を除く）

(2) 長所と課題

長所としては、リーダーシップを有し、社会が直面する課題を理解し、外国語を含めプレゼン力を身に付ける教育があげられる。上記1の発表、教員との質疑応答、学生同士の議論が多い授業の展開、及び上記3の課外活動への積極的参加等が反映していることが考えられる。

他方、課題としては、「外国語運用能力」がコロナ前に回復していない。これは下記5で示すように、コロナにより海外研修経験や海外ボランティア経験が不足している現状を反映しているものと考えられる。

(3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

上記(2)への対応として、今後も積極的に多くの機会を設け、学生の参加を促進していく必要がある。また「専門分野に関する知識・技能」は5学部中4番目にとどまっており、各コースの専門性をさらに深める教育のあり方も課題の一つと考えられる。

5. 学部・研究科設問項目について

コロナの影響により海外研修経験が大幅に低下していることが明らかである。ボランティア経験も、前回より上昇したものの、未だ回復途上と考えられる。

設 問 項 目	令和元年度	令和2年度	令和4年度
海外研修経験	44	—	↘ 19.4
ボランティア・NGO活動経験	38	↘ 22.4	↗ 26.1

* 海外研修経験は「ある計（4週間以内+5週間～3カ月+4カ月以上）」の比率（単位：％）

経済学研究科

1. 本年度の授業の中での経験について

令和元年度、令和2年度（以下「過去2年間」という。）の結果と比較すると、令和2年度で減少傾向となった項目のほとんどで、上昇傾向が見られる。特に、「学生同士が議論する授業」「演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業」の上昇率は顕著である。

設問項目	「あった計(よくあった+ときどきあった)」の比率(単位:%)		
	令和元年度	令和2年度	令和4年度
自分の考えや課題を発表する授業	100.0	94.1	95.4
教員への質問・意見を述べたことのある経験	100.0	88.2	90.9
学生同士が議論する授業	69.2	53.0	100.0
演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業	76.9	70.6	90.9
定期的な小テスト・レポートのある授業	92.3	88.3	86.3
Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業	100.0	94.1	90.9

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

過去2年間の結果と比較すると、令和2年度で減少傾向となったものの全ての項目で、コロナ禍前の令和元年度における数値を回復するかそれに近づく傾向となっている。

設問項目	「あった計(よくあった+ときどきあった)」の比率(単位:%)		
	令和元年度	令和2年度	令和4年度
他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験	84.6	76.5	90.9
教職員への学修に関する相談経験	100.0	82.4	90.9
授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験	76.9	58.8	95.5
授業や課題のためインターネットでの情報収集経験	92.3	100.0	100.0

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

過去2年間の結果と比較すると、授業出席科目数が減少したこと、授業時間以外での学修時間が収束していること、読書時間が増加していること、アルバイト時間が減少していること、などの変化が見られる。これらは、コロナ禍後に学生の生活時間や学修等時間の配分が変化していることを反映していると思われる。

設問項目	各設問項目において最も選択された選択肢の比率		
	令和元年度	令和2年度	令和4年度
授業出席科目数	7～8科目(38.5%)	7～8科目(41.2%)	1～2科目(40.9%)
授業時間以外での授業関連学修・経験時間	1～3時間(23.1%) 19時間以上 同率タイ	4～6時間 10～12時間(27.2%) 19時間以上 同率タイ	7～9時間(27.3%)
授業と関連しない読書時間	1～3時間(30.8%)	1～3時間(35.3%)	4～6時間(27.3%)
アルバイト・就労時間	「全くない」を除けば 16～18時間(23.1%)	「全くない」を除けば 4～6時間 10～12時間(11.8%) 13～15時間 同率タイ	「全くない」を除けば 1～3時間(18.2%)
個人的な趣味活動時間	1～3時間(46.2%)	10～12時間(29.4%)	7～9時間(31.8%)

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力（学修成果）について

(1) 学修成果の達成状況

過去2年間の結果と比較すると、令和2年度で減少傾向となったものの全ての項目で、上昇傾向となった。特に令和元年度との比較では、「社会が直面する課題の理解」「外国語運用能力」の上昇は顕著である。

設問項目	「身に付いた計(よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた)」 の比率(単位:%)		
	令和元年度	令和2年度	令和4年度
専門分野に関する知識・技能	100.0	100.0	100.0
情報収集力	100.0	100.0	100.0
課題発見・解決能力	100.0	100.0	100.0
協働力	92.3	94.1	100.0
リーダーシップ	84.6	82.4	86.4
社会が直面する課題の理解	100.0	100.0	95.5
外国語運用能力	100.0	82.4	100.0
発表能力	100.0	100.0	100.0
文章表現能力	100.0	100.0	100.0
パソコンで資料を作成する力	100.0	100.0	100.0

(2) 長所と課題

コロナ禍となった令和2年度におけるリモート授業を中心とした学修成果の達成状況は、全体的に減少傾向となったものの、対面授業を中心とした令和4年度では、全ての項目で、コロナ禍前の令和元年度の水準を回復するか上回る結果となった。コロナ禍後は通学が認められたために図書館を利用したり学生間の交流を深めたりすることができている。なお、過去2年間の結果と比較して、アルバイト時間が減少していることについては、学修行動の変容に関連するのか、学生の経済状況の変容に関連するのか、他の資料を参照しつつ判断することが求められる。

(3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

今回の結果では、大きな課題はみられない。既に「Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行う授業」の形態は定着していると思われる。また、対面授業のメリットを活かして図書館を積極的に活用することを学生に奨励したい。

商学研究科

1. 本年度の授業の中での経験について

回答において、「よくあった」、「ときどきあった」を集計すると、「(Q6) 自分の考えや課題を発表する授業」(94.7%)、「(Q7) 教員への質問・意見を述べたことの経験」(100%)、「(Q8) 学生同士が議論する授業」(84.2%)、「(Q9) 演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業」(78.9%)、「(Q10) 定期的な小テスト・レポートのある授業」(89.5%)「(Q11) Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業」(94.7%)であった。

この集計結果から、教員からの一方的な講義形式ではなく、学生同士、あるいは学生の質問への教員の回答が行われるなど、授業の多くがインタラクティブに行われていることが明らかである。また、授業内容の確認のための小テストやレポートの提出が定期的に行われ、知識の定着確認が行われるとともに、授業時間以外の学修をBbやメール等のシステム活用で補完する仕組みも十分な活用が進んでいる。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

回答において、「よくあった」、「ときどきあった」を集計すると、「(Q12) 他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験」(63.2%)、「(Q13) 教職員への学修に関する相談経験」(79%)、「(Q14) 授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験」(89.5%)、「(Q15) 授業や課題のためインターネットでの情報収集」(100%)であった。

Q12については、授業時間以外の学生間の議論の場が必ずしも多くないことを示している。また、Q15については、情報の取得先としてインターネット活用が補完的なものではなく、主要な情報源（あるいはそのみ）になっていないかどうかについて精査する必要がある。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

商研の院生では、授業時間以外の学修時間が週に9時間以下（1日平均1時間強）の回答が47.4%あった。約半数の院生が1日1時間しか学修に時間を割いていないのが現状である。読書時間も3時間未満が63.1%である。アルバイトについては全く行っていない院生が42.1%いる反面、週のアルバイト時間が19時間を超えて就業している者も26.3%いる。これは、経済環境が院生により大きく異なることを示すものである。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力（学修成果）について

(1) 学修成果の達成状況

回答において、「よく身に付いた」、「身に付いた」を集計すると、「(Q23) 専門分野に関する知識・技能」(89.5%)、「(Q24) 情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力」(84.2%)「(Q25) 物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力」(73.7%)、「(Q26) 他の人と協力して物事を進めていく力」(63.1%)、「(Q27) 必要な場合のリーダーシップを発揮できる力」(52.7%)、「(Q28) 社会（国民・地域・国際等）が直面する課題を理解する力」(47.4%)、「(Q29) 外国語の運用能力」(57.9%)、「(Q30) 学修した内容をまとめて、それを発表する力」(84.2%)、「(Q31) 表現すべき内容を文章にして書ける力」(68.4%)、「(Q32) パソコンで文書や資料を作成する力」(73.7%)であった。

商研という学問分野的な傾向なのか、Q28の数値は他の研究科と比較しても著しく低い（院生平均73.4%）。もう少し社会とのつながりの中で、マクロ視点で商学について理解を深めることが必要かもしれない。

(2) 長所と課題

学問的知識の修得や情報収集力・課題発見能力・プレゼン能力、文章表現力、PC利用技術等について、入学後の能力向上を学生自身が実感している結果となっている。他方で他者との関係において、リーダーシップの発揮や他人との協業については「ほとんど身に付いていない」と回答する学生が一定数いる。また、数字上では、「授業や課題のためインターネットでの情報収集」が100%を示していたが、獲得すべき情報のすべてをインターネットの情報のみに頼っているという現実があることも考えられる。インターネットの活用は研究を進める上での1つのツールという認識に立ち、多様な方法で情報収集する能力の涵養が必要である。

(3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

リーダーシップを発揮する能力、他人との協業やその推進という課題に対して、科目等によってフィールドワークやアクティブラーニングを効果的に取り入れた授業を検討する余地があろう。また、インターネットの活用については、情報リテラシーを高め、研究を進めるために必要な情報収集方法について今一度学生に指導する必要があるだろう。

工学研究科

1. 本年度の授業の中での経験について

「自分の考えや課題を発表する授業有無」、「教員への質問・意見を述べたことの経験有無」は令和2年度が100%だったため若干下がったものの、それぞれ96.7%、93.3%と高い値となっており、令和元年度に比べれば増加している。令和4年度は以前、特に令和2年度と比べるとN数が10から30へと大きく増加しており、以下の数値も含め、より実態に近い値が示されているものと思われる。「学生同士が議論する授業有無」および、「演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業有無」はそれぞれ93.3%、80%で令和2年度、令和元年度に比べ増加しており、教員の授業への工夫が続いているものと考えられる。学生同士の議論の場や体験授業が増えたためか、「定期的な小テスト・レポートのある授業有無」は令和2年度の100%はもちろん、令和元年度よりも低下し、83.3%であった。また、対面式が増えたこともあり、「Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業有無」も令和2年度の100%から93.3%に減少した。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

「他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験有無」は令和元年度から令和2年度にかけて90%台から70%に大きく減少した。これはオンラインによる影響と思われる。令和4年度は対面式に戻っている科目も多いがこの比率はあまり変化しておらず、微増の73.3%である。友人と話さない、あるいは友人を作れない状況が続き、元に戻っていない状況と思われる。「教職員への学修に関する相談経験有無」は友人との相談が気軽でなくなった令和2年度に増加したが、令和4年度は令和元年度より低い73.3%であった。「授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験の有無」と「授業や課題のためインターネットでの情報収集経験有無」についてもオンラインであった令和2年度に比べれば減少した。ただし、令和元年度との比較では上昇しており、それぞれ70%、96.7%であった。インターネットなどで気軽に検索することに慣れてきており、大きくみて増加傾向は変わっていないのではないと思われる。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

「週当たりの授業出席科目数」は1～2科目と13科目以上が多く、どちらも22.3%であった。工学研究科では1年前期に多くの授業を受け、後期からは研究を主にする学生が多かったためか、以前は1～2科目の学生が多く、科目数が多くなるほど少なくなる傾向にあった。授業形態の変更などにより、履修の仕方を変えた学生が一時的に増えたのではないと思われる。「週当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験時間」については4～6時間が最も多く36.7%に達した。次に多いのは19時間以上の23.3%であった。「週当たりの授業と関連しない読書時間」は1～3時間が最も多く、26.7%であり、読書時間は短い学生が多く、かつ増加している傾向にある。「週当たりのアルバイト・就労時間」は全くないと19時間以上がどちらも26.7%と多くなっている。これは令和2年度と同様であり、経済的支援が必要な学生数は減っていない状況と思われる。「週当たりの個人的な趣味活動時間」についても1～3時間と19時間以上がどちらも30%であり、二極化している。個人的な趣味に時間を使う学生が増加している傾向にある。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力（学修成果）について

(1) 学修成果の達成状況

「他の人と協力して物事を進めていく力」は令和2年度に80%まで低下したが、令和4年度は100%となった。研究活動などでは協働できていると思われる。「必要な場合のリーダーシップを発揮できる力」についても令和2年度は80%に低下していたが、90%とほぼ令和元年度と同様の値となっており、グループワークなども増え、学生活動が元に戻りつつあることがうかがえる。

(2) 長所と課題

「物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力」「情報収集能力」「プレゼンテーション能力」「パソコン活用能力」などを身につけたと考える学生は100%となっており、大学院生として必要な力が身につけられているようである。また、「社会(国民・地域・国際等)が直面する課題を理解する力」が身についたと考える学生は93.3%と向上してきている。一方で、「外国語の運用能力」が身についたと考える学生は80%に低下している。これは外国語を運用する機会が減ったためと考えられる。そのような機会の早期の回復が望まれる。

(3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

オンラインを主にした授業形態から多くの科目が対面式に戻ったことで、改善されていた部分が基に戻ったり、大きく悪化した部分が再び改善されたりしており、オンライン授業と対面授業の良いところと悪いところがわかりやすく表れたように思われる。今後は対面授業を基本にオンライン授業でよかった部分をできるだけ取り入れられるよう、工夫やその手法の検討が必要と思われる。

言語教育研究科

1. 本年度の授業の中での経験について

過去2年間の結果と比較して、上昇傾向にあった項目は、「演習、実験、実習、フィールドワークなどの体験授業」で、下降傾向にある科目は、「学生同士が議論をする授業」であった。その他の項目に於いては、大きな変化は見られない。

設 問 項 目	令和元年度	令和2年度	令和4年度
考えや課題を発表する	95.80%	100%	100%
質問・意見を述べた	100%	100%	100%
学生同士が議論をする	87.50%	88.20%	75%
演習・実験・実習等	62.50%	47.10%	79.20%
小テスト・レポート	91.70%	82.40%	83.30%
Black board、E-mail等	66.70%	88.20%	87.50%

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

過去2年間の結果と比較して、上昇傾向にあった項目は、「教職員への学修の相談」であった。コロナ過前の数値に戻る傾向が見られた項目は、「他の学生と一緒に学ぶ」「図書館で資料・文献を調査する」であった。

設 問 項 目	令和元年度	令和2年度	令和4年度
他の学生と一緒に学ぶ	91.70%	58.80%	79.20%
教職員への学修の相談	37.50%	64.70%	87.50%
図書館で資料・文献を調査	100%	70.60%	95.80%
インターネットでの情報収集	100%	100%	91.70%

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

過去2年間の結果と比較して、上昇傾向にあった最も多く選択された項目は、「出席科目数」「授業時間外での学修」で、コロナ過前の数値に戻る傾向が見られた項目は、「アルバイト・就労時間」であった。

設 問 項 目	令和元年度	令和2年度	令和4年度
出席科目数	1~2科目 29.2%	1~3科目 29.4%	3~4科目 29.2%
授業時間外での学修	1~3時間 29.2%	10~12時間 29.4%	1~3時間/19時間以上 20.8%
授業と関連しない読書	1~3時間 50.0%	1~3時間 47.1%	1~3時間 41.7%
アルバイト・就労時間	4~6時間/19時間以上 20.8%	なし 35.3%	19時間以上 29.2%
趣味活動時間	1~3時間 41.7%	1~3時間 41.2%	1~3時間 41.7%

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力（学修成果）について

(1) 学修成果の達成状況

過去2年間の結果と比較して、変化がなかったのは「課題発見・解決力」、やや下降傾向にあったのは「文章表現力」と「パソコンで資料作成」の2項目であった。その他のすべての項目に於いて、上昇傾向が見られた。

設 問 項 目	令和元年度	令和2年度	令和4年度
専門知識	95.80%	100%	100%
情報収集力	100%	94.10%	100%
課題発見・解決	100%	100%	100%
協働力	87.50%	70.60%	87.50%
リーダーシップ	70.80%	52.90%	87.50%
社会の課題の理解	75%	70.60%	83.30%
外国語運用能力	83.30%	88.20%	95.80%
発表能力	91.70%	100%	100%
文章表現力	95.80%	100%	85.80%
パソコンで資料作成	100%	100%	95.80%

(2) 長所と課題

学修成果は過去2年間と比較して、全体的に上昇傾向が見られる。特にコロナ過で一時的に落ちた数値が令和4年に回復し、よりよい成果を上げている項目が多い。令和4年度は対面授業が復活し、同時にメディア授業も継続して行われていたことも要因の一つと考えられるが、全体として教育内容の質の向上が成されていることが示唆される。

(3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

過去2年間と比較して、数値が低くなった「文章表現能力」については、演習科目等を通して、論文指導の強化を行っていきたい。

国際協力学研究科

1. 本年度の授業の中での経験について

本年度の調査結果を観察する限り、学生が主体的に学修する環境が概ね確保されていることが確認できる。項目別の結果を順にみると、まず「自分の考えや課題を発表する授業の有無」については、最近3回の調査で「あった」の値が100%を維持している。内訳をみると、「よくあった」の回答比率が増加傾向にあり、最新の値では84.8%となっている。「教員への質問・意見を述べたことの経験の有無」についても上昇傾向にあり、「なかった」の回答割合が2.2%へと縮小している。「学生同士が議論する授業の有無」についてはコロナ禍における遠隔授業という事情もあり、令和2年度の調査では「ある」の回答が一時的に80%まで下がったが、最新の結果では89%となり大きく改善された。「体験授業の有無」の項目では従来から、「ある」という回答が50%台で推移している。「なかった」との回答比率を下げるような工夫が必要であろう。「小テストやレポートを課す講義」についての「ある」との回答比率は、令和元年調査こそ80%であったが、その後は90%を維持している。「Bbやメールを活用した教材・課題の受取りや提出」についての「ある」との回答比率は、令和元年度調査こそ67%であったが、その後はほぼ90%台後半を維持している。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

授業外の学修態度については遠隔授業などで一時的に悪化したのが、最新の調査結果をみる限り、概ねコロナ以前の状況に持ち直している。項目別にみると、「学生同士の授業内容の話し合いや一緒に勉強する経験の有無」については、コロナ禍の令和2年度において「ある」の回答比率が68%まで低下したが、最新の結果では78%まで回復し、令和元年の結果を上回っている。また、「ある」と回答した学生に占める「よくあった」との回答比率が48%と増加していることも特長である。「教職員への学修相談経験の有無」については、「ある」の回答者の割合が、令和元年度の80%から、令和2年度の68%、そして令和4年度の74%と推移しており、改善傾向にある。また「よくあった」の回答比率が40%を超え、最近3回の調査で最も高い値となっている。「図書館を利用する機会」については、「ある」の回答比率は、令和2年度調査でこそ落ち込んだものの、対面授業への移行にともない、コロナ前の水準に回復し、今回は96%と高い結果となった。「インターネットでの情報収集経験の有無」では、「あった」の回答者はほぼ100%に近い割合で推移している。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

本年度の調査結果を観察すると、週当たりの授業出席科目数を除くと、学生は学修、アルバイト、趣味などにバランスよく時間を割いている姿が浮かび上がってくる。項目別にみると、まず「週当たりの授業出席科目数」では、「13科目以上」と回答した比率が30%前後と高い水準にあり、「1～2科目」の比率が次に高い状況にある。1年次に多くの科目を履修し、2年時には修士論文作成に専念するという傾向があらわれている。「週当たりの授業時間外の学修・経験時間」の回答結果をみると、「19時間以上」の割合は令和元年度の40%から、令和2年度の32%、そして令和4年度の11%と減少している。これに対して、「4～6時間」と回答する割合が30%となっている。全体的に、週当たりの授業時間外の学修・経験時間の短縮化傾向が観察される。「授業と関連しない読書時間」では、週当たり「19時間以上」と回答した学生の割合は33%、24%、17%と低下傾向にある。一方、「全くない」の回答割合は、6.7%、12%、2.2%と減少している。読書時間としては「1～3時間」が最も高い割合となっている。「週当たりのアルバイト・就労時間」では、令和元年度では「19時間以上」と回答した学生の比率は40%であったが、その後の調査では、8%、13%と大きく減少している。その一方で「全くしていない」の割合が27%、36%、37%と調査を重ねるごとに上昇している。最新の調査結果によると週当たり0～6時間で60%近い割合となっている。「週当たりの趣味活動時間」では3回の調査結果において「1～3時間」と回答した割合がもっとも多く、47%、44%、33%と推移している。回答者の5～6割は1週間当たりで1～6時間ほど趣味の活動に時間を費やしている。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力（学修成果）について

（1）学修成果の達成状況

コロナ前、コロナ禍、そしてコロナ後の3つの調査結果を観察する限り、学修成果に関する各回答項目で概ね良好な結果が維持されていることが確認できた。ただし「他の人と協力して物事を進めていく力」、「必要な場合のリーダーシップを発揮できる力」および「外国語の運用能力」の3つの設問では全体の1割程度の学生が「ほとんど身に付かない」と回答している。この点については、3回の調査結果に共通する結果であるだけに、今後の対策が必要となる。

（2）長所と課題

国際社会における喫緊の課題を研究テーマとする学生が多いため、情報収集・分析能力、課題発見および課題解決能力などの各種能力が講義・演習や研究活動を通して高いレベルで維持されている。今後の課題としては、アンケート結果に出ているように、学修での協力関係やリーダーシップ能力の育成、外国語の運用能力の向上が挙げられる。

（3）教育課程や教育内容・方法などの改善方策

上述の通り、「他の人との協力」や「リーダーシップの発揮」が他の項目に比べ見劣りする。このことから授業や演習などで、協働作業の機会を増やし、グループ作業を通じてリーダーシップを発揮する授業運営を行っていく必要がある。また、外国語に関しては、講義や演習などで日本語や英語の運用能力を高める工夫を検討する必要がある。

5. 学部・研究科設問項目について

研究科独自の設問項目は特に設定していないが、問題点の共有や改善の方策についての教員間での意見交換は研究科委員会などで日頃から行われている。実態把握が必要であると判断された場合には、研究科設問項目に速やかに反映させることにする。

地方政治行政研究科

1. 本年度の授業の中での経験について

○調査時点の本研究科在籍総数13名全員が回答した。内訳は、修士課程1年38.5%(5名)、同2年61.5%(8名)であり、外国人留学生比率は、69.2%(9名)である。

○授業内活動の結果については、以下の通りの結果となった。いずれの項目も、「あった計(よくあった+ときどきあった)」の数値結果である。

- ・ 教員への質問・意見を述べたことの経験：100%
- ・ 学生同士が議論する授業：92.3%
- ・ 演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業：61.5%(>全体平均58.5%)
- ・ Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業：100%

以上のことから、総じて、授業内活動が活発に行われたことが分かる。特に、令和2年度の「演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業」について総回答者(1名)が「なかった」と回答していることと比較して、本結果からは大幅な改善が見られる。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

以下の通りの結果となった。いずれの項目も、「あった計(よくあった+ときどきあった)」の数値結果である。

- ・ 他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験：100%
- ・ 教職員への学修に関する相談経験：100%
- ・ 授業や課題のためインターネットでの情報収集経験：100%

以上のことから、総じて、授業時間外の活動が活発に行われたことが分かる。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

- ・ 週当たりの授業出席科目数：13科目以上が30.8%以上で最も割合が高く、9科目以上を選択した学生の割合は、半数(53.9%)を超える。
- ・ 週当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験時間：4-6時間が30.8%で最も割合が高く、6時間以下を選択した学生の割合は、半数(61.6%)を超える。
- ・ 週当たりの授業と関連しない読書時間：4-6時間が30.8%で最も割合が高く、6時間以下を選択した学生の割合は、半数(53.9%)を超える。
- ・ 週当たりのアルバイト・就労時間：「全くない」と「19時間以上」が共に、38.5%と最も割合が高く、二極化している。
- ・ 週当たりの個人的な趣味活動時間：1-3時間が30.8%で最も割合が高く、6時間以下を選択した学生の割合は、半数(61.6%)を超える。

以上のことから、積極的に授業に出席する一方で、学生の就労時間が二極化する中で、授業時間外での学修・経験、読書時間、趣味活動時間に十分な時間を当てることが難しい学生の存在が懸念される。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1) 学修成果の達成状況

- ・ 専門分野に関する知識・技能
「よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた」：100%
「よく身に付いた+身に付いた」：69.3%
- ・ 情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力
「よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた」：100%
「よく身に付いた+身に付いた」：92.3%

- ・物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力
「よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた」：100%
「よく身に付いた＋身に付いた」：92.3%
- ・他の人と協力して物事を進めていく力
「よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた」：100%
「よく身に付いた＋身に付いた」：77.0%
- ・必要な場合のリーダーシップを発揮できる力
「よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた」：84.7%
「よく身に付いた＋身に付いた」：69.3%
- ・社会(国民・地域・国際等)が直面する課題を理解する力
「よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた」：100%
「よく身に付いた＋身に付いた」：77.0%
- ・外国語の運用能力
「よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた」：77.0%
「よく身に付いた＋身に付いた」：61.6%
- ・学修した内容をまとめて、それを発表する力
「よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた」：100%
「よく身に付いた＋身に付いた」：92.3%
- ・表現すべき内容を文章にして書ける力
「よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた」：100%
「よく身に付いた＋身に付いた」：84.6%
- ・パソコンで文書や資料を作成する力
「よく身に付いた＋身に付いた」：100%

(2) 長所と課題

上記10項目のうち8項目において、身に付いた(「よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた」)が100%となっており、令和2年度(7項目)、令和元年(9項目)と比べ、増加している。また、リーダーシップ(84.7%)及び外国語運用能力(77.0%)に係る項目については令和2年度(50.0%、25.0%)と比べ、改善している。

(3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

上記に示された改善傾向を今後も持続できるよう、現在の教育的取り組みの継続が求められている。